始

31
389
1

31-389/1

隨想錄

新渡戸稲造著

丁未出版社藏版

大正
7. 6. 25
内交

はしがき

これ予の隨感隨記なり。自ら英文を以て草し、鷗村君これを國譯せり。十年の昔始めて之を出版し、其版滅するや、予之を增補し、鷗村君其文を推敲して新版をなせり。然るに其版また遂に滅し、爰に迨んで君更に全篇の文章を加朱改修し、且つ之を縮刷す。其想は不易なるも、その現れは新また新、予は慈父が愛兒の再び新粧して門を出づるを送るの情を以て、此書の新版を悅ぶ。

大正七年六月

著者

目次

梅……一
殉道と成功……五
我が宗教……六
情と良心……七
櫻……七
教科書收賄事件に對する三つの聲……一三
視物の正位……一六
模倣……一七
學生……二〇
學生の夏期休暇……二三

萩……二五
靈魂神を求む……二七
靈魂自己を求む……二八
『東海吟』……二八
カーライルの教訓……三三
ひれ伏せる肉……四二
實在と理想……四二
日本美術の名譽……四四
京都の萩園……四五
性と行……四八
一般教育と特殊訓練……四九
靈魂永劫の尋求……五〇

理窟刻み……五一
自　制……五二
天賜の用……五二
感恩の念……五三
隱れたる天使……五四
人生の矛盾……五四
クリスマス所感……五八
一閃の思想……六五
島國根性……六五
平民道……六八
教育の缺陷……六九
治亂の心構……七五

東洋の米國主義……七九
二種の尺度……八五
日本の作法習慣……八五
良心の賞揚と非難……九〇
黄禍とスラヴ禍……九一
感　恩……九八
秋　思……一〇一
淋しさ……一〇四
哀　吟……一〇七
國自慢の戒……一〇八
川ばた柳……一一三
天外の音づれ……一一四

收　穫……一一四
波蘭語譯『武士道』序……一一九
溫故知新……一二四
過去と現在……一二八
小　兒……一二九
天の幻象……一三二
不機嫌……一三三
月影多々……一三四
思想の漂搖……一三五
遺　族……一三六
感謝の理由……一四〇
戰後の事業……一四二

心的不消化……一五一
謙　抑……一五三
夏天の飛行……一五六
母の愛……一五七
世の與ふる平和……一六一
夏期の注意……一六四
和戰の用……一六五
十字架……一六八
日本の新責務……一六九
日本國の時刻……一七二
新年の務……一七六
生命の喜……一八五

冬日所感……一八五
平泉にて……一八八
春……一八九
幻　影……一九一
武士道の向上……一九二
分　析……一九六
自然の一片……一九八
劍と筆……一九八
願　望……二〇二
海　上……二〇三
大帝國の墟址……二〇六
半　夜……二〇九

支那は孔子の國か……二〇九
日本の發達……二一二
修養と拘制……二一七
墓　地……二二三
現在の責任……二二四
沈默の時……二二六
神々と共に……二二九
我等の間に英雄なし……二三二
同窓の久誼……二三三
學生の移住……二三六
快　活……二四一
悲哀の用……二四四

惡中の善……二四七
いふ能はず……二四九
亡びんとする國家……二五〇
朝鮮の原始的生活と枯死的現狀……二五三
悲みの德……二五七
時　感……二五八
一年の幸福……二六五
正　月……二七〇
實際の理想に合する處……二七五
人物崇拜……二七九
春　想……二八三
一撮の鹽……二八六

花下にて……二八九
夜の教訓……二九〇
實行宗教……二九三
禮　節……二九四
文字の共義……二九六
田舍の道德……二九七
爲と無爲……二九九
宇宙の調和……三〇〇
望ましき成功……三〇一
矛盾の矛盾……三〇四
供へもの……三〇九
日本の基督教化……三一〇

悲みの惠……三一七
自然より自然の神に……三一九
自然主義……三二三
太宰府に詣づ……三二四

隨想錄

新渡戸　稻造著

梅

梅は咲けり。雪歌ひ、心奥の詩興また頓に發す。予は梅花の妙香を愛す。地なほ凝り、枝雪に埋まり、北風剪々として吹くとき、南枝先づ發いて、百花の魁たる此の花を愛す。梅を觀て、予は其の剛を賞す。予しばしば疑ふ、梅花の美ありて香しきは、其の剛に由るか、はた群芳みな耐へがたき逆境を凌いで、先んじ咲くに由るかと。

花あり、花あり、花多し。皆人の愛を惹くべき特質を備へて、おの〳〵

其の愛慕者あり。梅を賞するものは、櫻を愛するものと、自から其の性情を異にす。櫻は多者のためにして、平民的なり、その萬朶一時に爛漫たるは特に人目を樂しましむ。梅は寡者のためなり。心ある人のためなりといはんか。吾人は槎牙たる老幹、清香自から搖ぐを見て、其のチヤームを感ずる最も深し。梅は學者的なり、菅公嘗てこれを愛せり。

園丁某語りて曰はく、梅を探る人は、櫻に遊ぶ者と、自から其の質を異にすと。また曰へらく、梅を愛する人にして、萩咲きみだれ、紅葉色に出でゝ、秋の榮を飾るとき、再び訪づれ來らざるはなしと。

聞く、梅に名を得し月ケ瀬の里は、其の木相繼いで伐らるると。かの梅樹は尙ぶべく、賞すべきなり。何の無情漢ぞ、之を暴殘すること此に至るや。予之を聞いて、殺伐たる農夫を呪ふの思ひ禁ぜず。梅、何すれぞ、此の悲

しみに會する。古への無花果の如く、木既に實を結ばざるか。花その色を失ひたりや、その香を失ひたりや。今人はた梅松の蔭に坐して、祖先の樂を樂しむことを忘れたりや。國民の趣味一變して、參差たる風骨、苔蒸す枝は、既に其の美感に訴ふることなきに至れりや。否、然らず、月ケ瀬梅林の暴殘は此等の故にあらず。君敢て問ふ乎、然らば答へん。この殘害の由つて來る所のものは、皆彼のコールターなりと。獨逸人は黑きコールターより、價廉き赤色アニリン染料を製して、之を吾人に與ふるがため、曩に京都の絹物を染めたる梅實の染料は廢れ、月ケ瀬の梅林は、また之を支ふるに足るべき利益を生ぜず、こゝに一のヂレンマに逢着せり。卽ち梅林を伐るか、はた少女の美しき衣に美しさを色どる赤色、桃色を棄つるか、二者其の一を選ばざるべからざるに至れり。梅花の春を見るこそ優れといふもあらん。されど思ふに多くは、美しき衣の色こそ良けれといはん。此等

は云はん、梅花一春の樂みを擲つとも、爭でか少女が衣の花の色を奪はんやと。これに對し、少數は答へん、染料のみの故ならば、悉く月ケ瀬の木を伐つて薪となし、竈に投ずるも可なり。されど之が爲に失ふところは、豈にたゞ色のみならんや。清香消えて、他花これを償ふを得ず。黄鳥は伐り荒らされし古木の根に止まらず。梅に溺るゝミューズの神は、また歌を吟じて人の感情を動かさず、純朴なる農夫も、才華の詩客も、その悦びを得じ。アニリン染料の輸入は黄金の富を増すべくして、その時靈性は貧弱に陥るべしと。予は固より商工業の發達を冀ふ。されど梅樹の價を以て之を購ふべくんば、予は紅の絹、綠の絹の一尺を求むるにあたりて、先づ再考を費すべきなり。

殉道と成功

俗界の智慧は曰ふ、人生の成功は、社會の法則に遵ひ、衆人の思想、行爲に倣ふにありと。不良少年團の權力者は最癡の蕩兒なり。惡漢の仲間にありて、より多く成功の機會を有するものは、最奸の凶徒なり。

殉道者は反社會的なり。周圍に迎合せず、俗界の零敗者なり。俗界の慣習は之を非難し、俗界の審判は、之に分つに盜賊、殺人に附するに等しき報復を以てす。凡庸世界は、其の法則の埒外に生活、行動するものは、聖者たると罪人たるとを問はず、皆共に之を煩ひとす、殉道者は、人生の高尚なる法則に遵ひ、靈性の要求命令に答ふ。彼等は下界を天界に結び、新なる靈素を以て大氣を充たし、吾人の生命に授くるに、新たなる人生の味を以てす。蓋し殉道者は社會法則の標準を高むるものなり。彼等若しあら

ずんば、吾人の世界は、甚だ貧弱なるべし。殉道者の光焔は吾人を燒かず、却つて永へに吾人の道を照らす。

我が宗教

我が宗教を我に許せ、之を干はるなかれ。我が宗教を我に許せ、之を奪ふなかれ。我が靈魂と我が宗教とは一つなり。汝の宗教は汝のもの、宜しく之を守るべし。汝の宗教は日出の東に向ひ、我が宗教は日沒の西に面するも、將また予の道は天を仰ぎ、汝の道は地に俯するも、何ぞ夫れ苦しまんや。我等はおの〳〵異なりたる道を行くべし。我等再び相會して、互に手を取り、共に友情を溫むるを得るの日は、敢て遠きにあらじ。

情と良心

其の哀々たる聲をいとはじ。汝誠に欲する所を語れ。情は良心にむかひて、愛の秘密を告ぐ。良心は厲聲叱咤して曰はく、『汝、至愚。汝の愛は肉より生ず。汝は情人の顏を見るべからず。汝の心は腐敗せり』と。哀れなる情は絕叫し、冷酷なる良心は、其の嗚咽を顧みず。而して其の聲たゞ善く天使の耳に達す。

櫻

梅が香、鶯の歌の人心を新たにせしより、未だ幾旬ならず。先には空なほ寒く、地なほ氷りて、此の勇剛なる花魁と、その榮を競ふものなく、梅花ひとり花の世界の治者たりき。

時既に移り、季既に進みて、梅花の色も香も、みな共に失せたり。吾人は其の徐々として衰ふるを見、殘んの花瓣の最後の安息の床につくを追ひたり。然るに見よ、正統の繼嗣は現れたり。花國の王統は、此より彼に、順を追ひて傳へられり、曾て革命の變あらず。吾人は梅花の凋落を悲しむとき、日輪が吾人の身邊に來たしつゝありし變化に想到せざりき。

今や春の御代の移り變れるは人の目にも明かなり。梅、靜思を誘ひし日は過ぎて、櫻、欣然として人心を樂しましむ。冷嚴なる清教徒の時代は去りて、和煦たる王政復古（レストレーション）の快樂は來りぬ。國の歷史と、人の生涯とに於けるに等しく、季節に於けるも、また宿命の理は行はる。冀くは予を誤りて、徒らに人生を見ること、暗黑、厭世、不吉の觀念を以てし、世界は惡魔の權力に屈從するものなりとする、彼の宿命說を信ずるものなりとなすなかれ。予は時に榮枯あるは、潮に干滿あり、心理に悲喜の循環あるが

如きものなるを信ず。櫻は梅に繼ぐと雖も、やがて他の一層眞摯なる競爭者來りて、櫻の榮に代るべし。花おの〳〵時あり。賢者は四季の花に心を慰むべし。櫻笑みて、落花、風に飜るとき、吾人は鬱陶たる劇務を棄てゝ、公園に遊び、林間に入らんかな。いざさらば櫻狩して今日もくらさん。嚴肅なる老人よ、青春の樂みに還れ。內氣なる婦人よ、怡々として笑ひ戲れよ。小兒よ、嘻々として走れ。

予は曾て櫻は多者のため、衆人のためなりといへり。梅が知識に訴ふるの多きよりも、櫻が情緒を動かすこと更に深し。櫻が其の冷かなる姉に優りて　此の特長あるは、その榮華の極み、自然が人の血液を暖め、脈管の脈動を速かにするの時に於て來るに由る。梅は理なり、櫻は情なり。梅は一枝楚々として薫ずるにも、風情ありといへども、櫻は萬朶一時に發くを

以て最美なりとす。彼は遲々として旬日に香り、此は盛り久しからずして、咲けば且つ散る。人よ、櫻の悅樂を得よ。大いに樂んで、其の榮の短きを償ふべし。

櫻は衆の賞する所となるため、其の姉妹よりも悲運に陷ること多し。其の美は、花見る人の慾心を誘ひ、似非歌よみは、小枝に自作の短冊を結びて、誇りがに家苞となし、醉漢は爛漫たる一枝に酒樽を荷ふ。此の類の災厄は、櫻の美の招くところなり。古歌この美を歎ず。

咲かざれば、櫻を人の折らましや、
櫻の仇はさくらなりけり。

櫻はかく凡俗を誘惑するも、哀しいかな、自衞の武具を備へずして、容易く行人の兇手に折らる。櫻は歐羅巴の競手たる薔薇の如くに刺を有せず。此の二花は實に東西兩洋を代表す。薔薇に熱意あり、櫻に生氣あり。薔薇

は生を愛して死を歎き、櫻は死を輕んじて、風のまゝに、梢より飛んで空に飜る。薔薇は個人的なり、自主的なり、一輪の花に、一輪の美あり。櫻は簇り咲いて賞すべく、一朶の白雲に集りて個性を沒脚す。薔薇は權利を表し、之を要求すべき機關を有す。卽ちニーチェが主人道德と稱するものを表章す。櫻は義務を表し、運命を知りて之に服從す。かの獨逸人は、或は之を目して、奴隷道德の典型なりといふべし。されど薔薇にもなほ謙讓あり、賞者の下瞰に滿足し、喬木の高きを得ず。之に反し、櫻は崇拜者をして仰視せしむ。櫻に灌木の低きあらず。

花散る木の下に立つ時、心は塵外に去り、舊想を忘れて新思の衝動を感じ、少時人生の修羅場を忘れ、自己をして唯だ現在の爲に生活せしむ。農夫は犁鋤を棄て、老婆は紡車を去り、哲人は卷を蔽ひ、武夫は劍を投ず。

冀はくは吾人の思想、聊かも快然の春興に相反するなからんことを。少女叱して曰はずや。

咲いた櫻に、なぜ駒つなぐ。
駒が勇めば花が散る。

好戰と軍馬とは、我が花と調和せず。その美を仰がんとせば、先づ汝の兜を脱すべし。古來櫻を以て武夫の心を型るものとせり。蓋し、武夫は戰士以上のものなることを意味す。櫻は武夫に於ける戰士以上の大なる人格を代表す。

櫻花の蔭に徘徊して、種々の回想の切りに我心に生ずるあり。されど櫻の使命を聞くに忠實ならんとせば、須らく回想を棄てゝ、之を他日に委すべし——涼風、萩花を吹くの秋か、はた氷雪、梅花に薫ずるの冬こそよけれ、今の如きはたゞ嬉々たる樂みに、浮かれ〳〵て其の日を送らんかな。

教科書收賄事件に對する三つの聲

世俗の聲

ハア、、小盗は忽ち捕へられたり。小盗を捕へよ、大盗を逃すなかれ。法網を張ること、廣く且つ密にして、誰あつて其の目を脱するを得しめざれ。苟も罪ある者は、人物、地位、階級の何たるを問はず、大小こと〴〵く之を捕へて、淨玻璃の鏡に照らすべし。吾人は罪人に對し、飽くまで正義を加へんことを望む。吾人は法を行ふにあたりて、一點一劃も苟且に附せざらんことを希ふ。法官が幾許人の多きに罰を加へんも可なり。多謝す、吾人は彼輩より優れたるを。吾人は容易に買收せられず。また容易に捕拿せられず。ア、世は奸惡に滿てるかな。

良心の聲

ア、、人間中の最弱、最悪なる者よ、汝何をなしゝや。唾棄すべき二足獸よ、汝は心髓までも腐敗せるにあらずや。汝は最早白晝出でゝ濶歩するを得ず。黄白の爲に良心を鬻ぐものは、ユダの兄弟なり、宜しく其の首を木に縊るべきなり。

汝は黄白の光と音とに代へて、汝の持てる凡てのものを鬻ぐ。黄金斯くも貴きか。ア、汝パリサイの徒よ。汝は青年の師として、如今何の口實かある。汝は血涙を濺ぐべし。その涙の一滴々々は、汝が目を悅ばし、黄白に十倍するの力を以て汝を譴責すべし。

予の屢〻汝を戒めたるは、汝よく之を知る。汝の墮落せんとする瞬間、予は有らん限りの聲を厲まし、汝は之を聞きたり。されど汝は之を心に用ひざりき。知れ、予は今汝の審判者なるぞ。汝に加ふるに嚴罰を以てするの力予に在るを知れ。予の加ふる懲罰は、世俗が、徒らに痛罵し、徒らに威

嚇すると異なり、至嚴至酷、而して永續するものなるを知れ。

高き聲

ア、汝哀れむべき煩悶の人よ。世は汝を棄てゝ、友なく、憐みを得ず、慰無きものとせるか。良心は汝を棄てゝ、片言の慰藉だも加へず、一顧の奬勵だも與へざるか。されど落膽するなかれ。汝全く亡びたるにあらず。汝の悔恨は聞かれざるにあらず。良心よりも更に貴き賜は、なほ汝に存し、汝なほ其の與ふる悲痛を感す。汝なほ泣くべき心を有す。ゆゑにいまだ全く滅びざるなり。されば奮起せよ。汝は名譽を失ひたり、されど之を回復するを得ん。世には義の太陽の照らさゞる如き深淵あらず。汝は不義に沈みたり。されど奈落の底にも階段あり、悔ゆる心は之を攀ぢて再び登り來るを得べし。汝之を確知すべし。人たとひ墮落の深淵に沈むとも、彼は全く滅ぶるにあらず、天より生れしものなることを要求し、要求して善用す

る能はざるに至るものにあらず、汝は常に死せる自我を踏石となして、向上の一路に進むことを得べし。

（明治三十六年二月）

視物の正位

郷里盛岡に近きところ、麗美なる岩手の名山、碧空を摩して屹立す。此の山或は悠々たる白雲その絶頂に簇り、或は漠々たる暗雲その中腹に集まるを常とし、その全景を現すこと極めて稀なり。汽車に由らんか、山麓數里に沿ひて馳せ、この山を視ること數時なり。里人稱す、全山の麗容と威貌とを見んとするに、たゞ一の正位ありと。北上川徐に其の麓を流るゝところ、河中渺たる一沙洲あり、洲上孤松生ず。君若し、東北富士の絶景を收めんとするか、須らく此の亭々たる松樹の下に佇むべし。

模倣

今日なほ品行論者—殊に極めて淺薄なるルボンの學派を奉ずるもの（彼が如き淺薄皮相の說も、なほ之に隨喜するの徒ありとせば）の常として、人類間には精神的默契又は道德的同情なるものゝ存在することを忘れ、何等確たる論據も無きに、人種的差別—人種的精神—が判然區分せられて、彼我互に調和する能はざるものとなす。而して此の前提よりして、過去五十年間に於ける日本一切の變化か、單に小兒的模倣に基づくものなりとの推斷を下す。彼等は模倣そのものが—吾人のなす如き善良なるものならんには—模倣をなすに足るだけの能力を有せざれば、否、模倣すべき事物を辨識するに足るの智力無くんば、或る程度以上に進步すること能はざるものなる事を忘るゝものなり。模倣—適用、受納の力を含める模倣は、生物

上、論理上、最も必要なる行爲なり。擬似が動物に在りて自衛の主法なるが如くに、模倣は人にありては、教育の大部分を成し、國家にありては、之を保全し、且つ之を教導するものなり。

エマソンに學ばずや。彼は敎へて曰へらく、『溫健偉大なる力とは、全然創始的なるものにあらずして、要するに受納的なり。世と共に推移し、潤然として心を時代の精神に開き、之を受け入るゝものなりといふを得ん』と。『偉大なる力』にして然りとすれば、吾人の稱して凡人と稱する凡庸者流の大集合に於いては、尙一層然るものあるにあらずや。人類文化の歷史は、要するに模倣の歷史なり。近時ウードベリー敎授は『文學上の人種勢力』を論じて、『或る大なる敎化は更に、新しき收穫の爲に地を肥やさんとして死し、或る文明は、更に美しき市の建てらるべき丘たらんが爲に、破碎して塵芥となり、或る人種は、劣等野蠻の民族が進步して、文明の寶を

繼承するに至らんが爲に、其の力を失ひつゝあり』といへり。されど如何にせば、後進が先進に襲ぐことを得るや。他なし劣等―否寧ろ新興少壯の人種が優者、先進に學びて、之を敬重し、また之を模倣するを必要とす。主曰はく『我に從へ』と。而して予等は綠滴る牧場の羊の如く、水邊にも、屠所にも、はた犧牲の祭壇にも隨ひ行く。人類の到達し得たる至高至尊の性格は、トマス、ア、ケンピスの如く、基督の模倣に由りて來る。

人或は曰はん。若し政治上、社會上に完全なる模範とすべきものあらば、模倣も甚だ可なりと。されど斯くの如きは、得て望むべからず。予はたゞ自個よりも優るゝものあらば、完全ならずとも、なほ取つて以て我が範とせん。『隣人に就いて汝よりも秀でたるものを認め、之に達するまで、自ら行ひ勉むべし』とは吾人の敎訓なり。雖新御誓文の一ケ條は、明かに之を宣して、新政の大方針とせり。吾人は忠實に之を守り行ひ―而して更に進

んで模範より超越せんとするの希望を有す。出藍の譽は、たゞ藝術の範圍にのみ限らるゝものにあらず。

學生

生るゝ學生あり、造らるゝ學生あり。後者にありては、知識が周密なる研究の報酬たること、恰も腕力が稽古によりて增大するが如し。之に反し前者にありては、知識は恰も大氣を呼吸するごとく速かに來り、尋常茶飯と同一般なり。生れたる學生は、何等の勞苦も必要とせざるものゝ如く、其の學問は實に見事にして、容易なり。されど彼とても、凡ての眞理を無造作に解し得るにはあらず。自然は絶大の天才に對しても、なほ秘密を藏し、彼が刻苦して之を開くを俟てり。吾人は丈七尺を越えたる男を、巨人として畏敬す。されど小人國、リ、プシアンの國に赴けば、四尺四寸の小

男も忽ち大男となる。七尺の身長も、之をレバノンの香柏に較ぶれば何ぞ。レバノンの香柏も、之を其の生ずる山巒に比すれば何ぞ。小人も一層の小人の前には巨人なり、巨人も一層の巨人の前には小人なり。天性知解方に富める學生なりとも、一歩を登る毎に、知識は現在の力量以上にあることを認む。最良なる學生の最大能力も、進歩の各階段に於て、其の前に横たはれる問題を解決するに苦しむ。ニュートンも、己が知力は、果し無き知識海の濱の眞砂の一粒よりも小なりと自白せり。

容易に幾許かの簡單なる眞理に通ずるが故に、輕薄なる社會よりして、天成の學生と呼ばれ、賞めそやされ、スポイルせらるゝ青年は實に憫むべし。斯輩は自ら其の所有せざる能力に阿り、容易に捉へ得たる些少のものを以て自足し、一層貴重なる才能を練磨することを怠り、終には其の能力をして完全ならしむるを得ず。彼は一の問題を解せば、更に新たなる十問

題の生じ來るを忘る。學問は無限の勤勞なり。世間最も優れたる天成の學生も勤勞を解するを得ず。學者たらんとするのが、自己の先天的能力にのみ依賴して、耐久的努力を缺くは、卽ちカーライルが敎へたる『天才とは無限大の勞苦に耐ふるの力なり』との貴き眞理を忘るゝものなり。諺に曰はく、『學問に帝王道路なし』と。然り力行のみ、能く此の帝王道路を開くべし。

生れたる學生も、尙且つ努力を辭する能はずんば、自己を一個の學生に造り上げんとするものは、果して何をかなすべき。ア、更け行く夜半の燈臭に染む者を賤しんずるなかれ。彼は自己の向上を圖る者なり。彼は卑微なる礎上に、天使の來迎を受くべき高樓を築くものなり。何等特殊の才能を稟けずして、この不可思議世界に生れし彼は、自ら智慧の扉を叩いて撓むことなし。其の楣間を見よ、『求めよ、さらば見ん』と記せり。見るべし、

彼が求むることの如何に切なるかを。彼が燈火は燃え盡きたり。乃ち夏の夕は窓に螢を集め、冬の夜は机上に雪を積む。此の輩眞に吾人の同情に値するのみならず、また至大の尊敬を受くべきものなり。生れたる學生が、其の天稟を以て、吾人の讃歎を促すとぜば、造られたる學生は、其の忍耐のゆゑに、之を受くべきなり。吾人が天才に對して注ぐ賞讃は、之を有する者に與ふるよりは、寧ろ彼に傳ふるに此の天才を以てせる、その祖先に對して棒ぐる敬意なり。造られたる學生に與ふる賞讃に至りては之と異なり、彼自ら獨り之を受くべきなり。

學生の夏季休暇

夏季休暇は再び來りぬ。吾人は學期試驗の好結果によりて、欣然、快然これを迎へたる乎。はたまた失敗の重荷を負ひながら、その追及するとこ

ろとなりたる乎。今や悔恨の時にあらずして、疎懶なるべき時なり。暫く悔恨を去れ。汝の足より都塵を拂ひ、汝の額より東都の太陽の炎熱を拭ひて、速かに田舍に赴くべし。故郷の山に入りて、清鮮なる大氣を呼吸し、故郷の流に浴して頭腦を冷靜にするは、汝の益なり。肺量の許す限り、松林の香芬を吸ひ、健全なる日光によりて、汝の淡黄なる皮膚を黑くせよ。これ中宵燈を挑げて消盡せしめたる精氣を回復し、都生涯によりて薄弱ならしめられたる勢力を更新するの道なり。鄕里の空氣には健康あり、田家の生活には勇氣あり。都會は雄壯、豪快の氣を毀つ。この氣を保持するを得るは、單に田舍的血液の循環斷えざるに依る。都會の光榮は社會てふ植物の開花に過ぎずして、其の根幹は、田舍の地味の培養する所なり。夏季休暇は卽ち盆栽の花卉が、原土に復するの期なり。田舍は勢力の藏庫なり、國家强壯の元素なり。體健心明の源泉なり。

翼はくは、學生の悉く夏天に際し、東京その他の都會を去るを得んことを。一歲月中、此の日の如く、身體腦力の堅實を害するはあらず。身體は昏睡と昏睡の生ずる凡百の誘惑とに陷り、腦髓は其の平衡を失するの虞あり。故に罪惡と自殺とを生ずること、夏日を最も多しとす。學生よ、筆記を棄て、煤燈を去りて、故郷の山川に向つて急ぎ走れ。而して吾人は、秋季に及びて、既に成功せるものは、更に大なる成功を期して歸り、失敗せるものは、新たなる功績を得、過去を『踏石』となすべき決心を携へ來りて、透明なる思想を求め、確固黽勉の備ある諸君に見えん。

萩

萩なほ早しと雖も、既に花を開いて魁するあり。予は七月の初、鎌倉なる觀音の庭園に於て之を見る。之を見るとき、琴線ひそかに搖ぎ、而して

ア、予は一聲吟ぜんとして、舌戰き、遂に韻を得ず。

盛夏の日既に秋天の約束あり。人は自然の備ふる花の學舍に於て、孟夏歡喜の中に、勁秋凋落の休徵を讀むことを知る。これ人生の高潮にあたりて、其の凋落の未來を示すものなり。予は凋落なりといふと雖も。聖者は之を以て成熟はた成果なりと曰ふべし。聖ポーロは麥粒の死せるを見て腐死を見ず、却つて新たなる生命を認めたり。それ人生に失望するものは、愚人なり、懦夫なり。

"Alas for him who never sees
The stars shine through his cypress-trees."

（哀しきサイプレスの木の間より、
天つ星の輝くを見ぬものぞあはれ。）

萩は果實を結びて人間を養はず、されどこの花、吾人をして豐けき未來

に想到せしむるを以て、之に感謝す。予は萩の與ふる教訓を學ぶを得て、聲また戰かず。予は人生の宏大―其の義務、その歡喜、その更新を歌ふ。

靈魂神を求む

しば〳〵自問す、ア、神よ、汝は誰ぞ、汝は何處に在ますかと。答聲甚だ靜かに、予を誰ぞと問ふ汝は誰ぞ。汝即ち我、我即ち汝なり。予を何處に在りやと問ふ汝は何處に在りや。汝の在るところ、即ち我の在るところ、我の在るところ、即ち汝の在るところなりと。

吾人は神を拜して己を拜し、己を拜して神を拜す。人の衷なる眞我―自我―の本體は靈なり。吾人は肉と肉につける慾望との弊衣を以て、靈の自我を蔽ひ、却つて自我に屬せざる外物を捉へて、之を眞我なりと譜す。

靈魂自己を求む

ア、我が靈魂よ、汝、何處に在りや。汝、其の所を得たりや、はた本處を迷ひ出でたるか。汝は友とするに足らざる小人、癡子の間に彷徨するか。汝の居は、天の所生に適はしかるべく、汝は天の萬軍に加はるべきなり。

『東　海　吟』（野口氏詩集序）

『預言者は其の故郷にありて尊ばれず』と。歴史上多くの實例ありて、而も陳腐なる此の一句は、正しく一般世俗の常理なるも、また吾等の間の如くに、能く當はまるは無し。吾人の空氣には、物を弱小にする力あり、日本の大氣は、濕り過ぎたるに拘らず、而も『富と譽とに知られざる』青年が、たま〳〵何等かの使命を帶びて現はれ來ることあらんか、凡俗は、乍ち結

托して、隱謀を廻らし、彼に被するに『濕ひたる毛布』を以てして、彼が『靈性の溫かなる流』を凝結せしめんとす。我が文學史の光明たるものにして、隱逸の士に少からざる所以は、察するに凡俗なる社會と、些々たる嫉妬羨望とに遠ざかり、また喧々擾々裡より超然たるを欲せしもの多きに由る。予若し、求められざるに敢て訓戒を與へんか、予は我が國有爲の青年に對して、當にかくの如く告ぐべし。曰はく、『我が文學の徑路を去りて、此の地以外、羅針盤の示す處、何等かの方面に馳すべし。若しまた此の土に留まるの要あらば、靈性を持すること善く平靜にして永遠と語り、以て時の到るを俟つべし』と。此の語、若し我が國と我が國民とに對する愛念を缺くが如しと云ふものあらんか、予は之に答ふべし。予若し我が民族の天性に、丈夫の才幹、雄大なる氣象に對して、絶對の信仰を有すにあらずんば、安んぞ此の言をなさんやと。日本人若し果して、眞に發達進歩すべき性能

を有するものならんか、吾人は其の實を示すべきなり。

科學者あり、若し日本人民の活力を試驗せんとせば、吾人の中より尋常なる一青年を拉し來りて、試みに之を外國に移し、新たなる境遇に置きて、其の發育を實驗すべし。この實驗は、米國太平洋岸に於て盛んに行はれつつあり。たとひ成功者は百人中の一人に過ぎずとするも、以て特殊なる個人が、活力を有することを示すのみならず、また以て全民族の活力を證するに足る。吾人は野口米二郎その人に於て、之が著明の一例を見る。

唯一個の青年たる我が友人は、飄然、狹小なる村閭を去つて、太平洋彼岸の大陸に赴きたり。古き町の惰眠を去りて、聖フランシスの都の擾々に入れり。姿大きく丈高き女の中に交はらんがたゝ、笑顏美しきーお花さん、お蝶さんに辭別せり。されど故國の記憶は、曾て彼の熱烈なる胸中に滅すること無く、シーエラの山谷も、彼をして、不二の靈容を忘却せしむる能

はず。カリフオルニアの清澄なる大氣に浴して、彼の想は山田の夕霧に漂ひ、亭々たるシークオイアの樹より轉じて、心を洵美なる日本の楚々たる古松の老幹に寄せ、莊嚴天に聳へ地を剪くエローストーンの大公園に在りて、櫻咲く花の園生を夢む。その地人民の實際的傾向も、彼が神祕を愛するの念を奪ふ能はず。其の詩は、彼の生地と、其の寓處との消息を共に洩す。此等は東邦、西土の幸福なる配合によりて生まれ出でしものなり。彼れの夢、若し之を己が同胞に告げだらんには、その運命は、かのヨセフに優ること能はざるべし。然るに彼は生得權によりて有するにあらざる一の國語を之て以を說き、而して彼は此の語を以て、其の未だ達し得ざりし目的に役し、我が用を充たしめんとせり。句法、詩法等の口傳、または規則等に拘束せらるゝこと無く、最も大膽に英語を使用して、彼の作品に供するに、或は怪奇の特質、或は異樣の色彩、または質實なる日本的優情を以

てせり。其の語には色あり、其の句には香あり。蓋し外國語を以てするの故により、將た其の題目の往々にして、甚だ纖麗なるが故により、或はまた其の心質の往々あまりに夢幻的にして、之を言語に現はすの難きが故に由るか、彼の詩は何物をか感得して、之を我等に語らず、また漠然と曉りて、而も言ひ現はさゞる何物かのあるを感ぜしめて、嬉しみを與ふ。音調の不分明なる中に、言ひ難きチヤームあり。支離滅裂そのものは、彼の神精の一躍して過ぎ往く空隙を滿たせり。ニーチエ曰く、『山々の間の最も近き路は、頂上より頂上に越ゆるにあり』と。而して彼れ更に曰はく、『されどこれを爲さんとせば、汝は長脚を有せざるべからず』と。我等の詩人は、其の同胞と異なりて、この長脚を有す。

茲に吾人が知己なり、親戚なりと誇るに足るべき詩人あり。彼は詩歌の口傳の煩雜なる蛛網を拂ひ去り、また人をして隘小ならしむる故鄉の勢力

より脫して雄大なる大陸の自由の大氣中に、聲を極めて其の歌を歌ふ。

爰に吾人の愛する國土に產したる一輪の花あり。菊の如くに、新らしき栽培と、新らしき境遇との下に、更に美しくして大なる花を開けり。

彼は我が民族の一典型なりや、將た特殊の一例なりや。彼は我が國民の特質を代表するものなりや。また單に偶發者と認むべきや。文學上の日本は、宜しく野口米二郎の五字に照らして、此等の問題を考究すべきなり。

カーライルの教訓

『カーライルとは何者ぞ』とは、六十年前の英國に於て、また二十年前の我が國に於て、口に筆に、しば〳〵上れる問題なりき。之に答ふるがため、斯人の生涯に關する多くの逸話が、書籍、小冊子、雜誌の文章、新聞の記事等、あらゆる形を取りて現はれたり。啻に英國に於けるのみならず、ま

た彼の故國を距ること遠き我が國に於てすらも、カーライルの醜面は、夙に人の熟知するところとなれり。

斯人に關し知ることの多きに隨ひ、更に『カーライルとは何ぞ』との問題新たに生じ來り。文學界、倫理界及び哲學界は、之を論じて多忙なり。

カーライルの著述は、文明社會の共有財產なり。彼の言語と、その現はす思想とは、大氣に漂へり。幾許かの限られたる意味に於て、彼は思想の王國を領有せり。吾人は彼の思想に思ひ、彼の思想より遠ざかること能はずして、全く吾人が心裡の人なり。カーライルが思想上、道德上の一大現象たることは、啻に十九世紀に於いてみ然りしにあらずして、現世紀に及ぶも尙且つ然り。

吾人は單にカーライルの文學を究むるのみを以て滿足せず、また之を主眼とせず。さればカーライルの著述に關して多言を須ひず。吾人に最も密

接なる關係を有するものは、彼が與へし道德上の隱現せる感化なり。吾人は此の預言者の多方面なる感化の、あらゆる形態に就きて、其の道德的性質を考察せざるべからず。吾人の時代は實に之を要す。

宗教上の僞辯、社交上の弊習が、基督教的英國に跋扈せし時代に當りて、厲言叱呼、凡百の虛僞に抗し、明白にして誤解すべからざる言語を以て、僞善國民に教ふるに、良心と一致行動すべきことを以てしたるものはカーライルなり。英國が、尨大なる富力と工業とに蠱惑せられて、自尊、自負の驕奢に耽れる時に當り、其の國民をして、凡そ國民の偉大なることは、煙突若くは軍艦の數によりて量り得べきものにあらざることを顧慮せしめたる者はカーライルなり。英國人の飽くなき貪婪心は、種々の奸計によりて廣大なる領土を獲、而も更に增長しつゝありし時、彼等に教へて、"Higher Britain"（高尙なる猊利顚）を喪はば、縱令天日曾て沒すること無き"Great-

er Britain"（大貌利顔）の全領土を擧ぐるも、以て之を償ふに足らざることを說きしものはカーライルなり。

斯の如き使命を傳へし人は、當に古今東西共に耳を傾けて、其の言に聽くべき價値あり。吾人が僞辯、惡習の下に屈するの狀、英國と擇ぶところなきのみならず、而も一層甚だしきものあるにあらずや。日本人は、何等特に誇るべき根抵を有せずして此に至れるが故に、英國人に於けるよりも、一層害毒を被れるにあらずや。吾人の自尊心は飢ゑ渴くが如くに、海外の領土を欲望せずや。吾人は奸計も善策も、共に其の目的を達する能はざるが故に、切齒慷慨せずや。

カーライルは英語を介して人類の間に正義を唱へたり。彼は先づ之を其の同種族に語りたり。英國の社會が、この熱罵の預言者を尊敬するは、卽ち其の國民の偉大なるを證す。彼れは放言して『英國人は二千五百萬の愚

人なり』といへり、此の語必ずしも英國人は、東邦君子國人に比して愚物なりとの謂にあらず。吾人は潛心、彼が言語訓戒に學ぶべきなり。たとひ彼が下せる歷史の定義、或は英雄の評價を是認する能はざるも、カーライルと共に、虛僞は人をして善良ならしめず、僞辯は人をして偉大ならしめざること知る。抑ゝ善と大とに到達するの第一步は誠實にあり、己に誠なるに在り、善良なる本能に隨ふにあり。

心だに誠の道にかなひなば、
いのらずとても神やまもらん。

汝が衷心に存在するものに隨ひて、事を爲さんとするか、さらば汝、全力を擧げて之に當るべし。曰はく『心に充つるよりして、口に言はるゝなり』と。吾人の心奧に働くものありて、手は打ち、足は步む。人あり若し自ら正しき確信のために、已むを得ずして起つにあらずんば、たとひ此の

世の業に成功するも、其の爲すところ徒らに傀儡の戯伎に過ぎず。

行、誠なるべしとは、カーライルが其の言語、其の一生を擧げて、世道人心に說き示したる福音なり。言語は行爲なり、而してペンが善人、偉人の手に在る時は、其の切ること、兩刄の劍よりも鋭利なり。人の行の眞價は、其の胸底に存する動機の如何によりて量られ、また其の活動を刺激する誠實の如何によりて秤らる。故に人の働は其の大小を問はず、吾人は之を見て思想の活動を觀、理想の實現を觀、精神の勞作を觀る。人間の働には、凡て人の思想其のものが現出すると共に、また之に精神的意義あり。精神的眼光を以て、人生に精神的意義あるを觀るは、卽ち智慧の始にして甚だ尙ぶべし。之に比すれば他はみな粃殼の類のみ。王者の心を有せざる帝王は、金衣、玉冠を着るも、畢竟"forked radish"(二股大根)に過ぎず。農夫も精神的使命を有せば、彼が大根畑を耕すは、卽ち人生をして更に美

ならしむが爲に勤勞するものとなる。カーライルは、吾人の道に一閃の靈光を照らして、眞理を明かにせり。

此の光明に照らせば、實在は崇められて理想の體現たる眞價を有し、凡ての實在に於て理想を觀ることを得べし。而して之によりて判ずれば、善惡、大小の標準の如きも、カーライルの觀るところ世俗と異なり、最も賤しき日も、其の日爲す所の最も賤しき煩勞も、共に過去の智慧を敎へ、最も平凡なる勞作にも、賢者に與ふべき敎訓あり、現在とは、蓋し過去、未來てふ二個の無極の湊合せるものなるを知る。

現時の一大害惡は、人生に失望し、また之を厭棄することなり、うら若き靑年者流が、淺薄なる哲學觀を抱き、十錢文學を以て、其の羸弱なる腦漿を養ひ、只だ一口のショーペンハウエルと、一片のニーチエとを嚙り(此等は凡て自ら理會せざる三文文士の飜譯より得て)、彼等のチツポケなる身

體を投與して、魚また鳥の餌たらしめんが爲に、華嚴に奔るものあり。(これ實に人生の嚴峻なる義務を遁がるゝ、臆病未練の精神に相應せる最期なり)然らずんば、我が良心の畏ろしき聲を打消さんがために、己を擲つて、放蕩淫靡に溺るゝものあり。また或は—此輩は此の柔弱漢中に在りては、多少優れるものならんも—沮喪し、失望し、哀れなる聲を放ち、嗚咽して、この堅固なる大地を歩むものあり。ア、賤しむべき二足獸よ。汝等はカーライルを讀む能はざるか。『サルトル、レザルタス』を取つて、人生とは、誠に何物を含蓄するものなるかを知れ。『クロムウエル傳』を取つて、神を畏るゝ人の、果して何事を成し得るかを知れ。『フレデリッキ大王傳』を取つて、峻酷なる修練によりて鍛へられたる强大なる意志は、果して何等偉大の力を有するかを觀よ。『佛國革命史』を取つて、神は義に依りて審判する者なることを知れ。『バーンス傳』を取つて、いと貧しき世路を歩むとも、人は天然の眞美と秘義とを明かにするを得るものなるを悟れ—夫れ天然は開かれたる神の書なり、盲者にあらざるかぎり、走りながらにも之を讀むことを得べきものなり。

斯の如きもの—之よりも多きもの、これカーライルが吾人に齎らせし使命なり。此の使命は遠く廣きに傳はり、精神界の一大現象として、大氣に漲り、恰もオーゾンの如く、空氣をして清淨ならしめ、興奮の用をなす。老人、また老の將に來らんとする者には、かゝる精神の興奮の、或は强きに過ぐるあらん。されど最も煩悶し、最も自惚をなす時代—十五才乃至二十五才の年輩—の青年に對しては、カーライルに優れる良師あることなし。汝、決心を起すとき、また人生の大危機に於て、品性を定むるとき、彼善く汝を益すべし。彼を讀め、然らば彼に超越するもせざるも、汝は人生、天然および神明につける端嚴莊重なる觀念を得て、陰鬱不快なる思想を去

り、以て永遠カーライルに感謝するところあるべし。

ひれ伏せる肉

あゝ喜ばし。肉の巨人傲然として、其の權に欣躍して餌食を漁るとき、悔恨は忽ち彼を地に打ちて死に瀕せしむ。肉の徐に我に復するや、新たなる喜び—祭壇より注ぎ出づる酒盃—の爲に、大御惠の御座に跪く。

實在と理想

もろこしの山のあなたた立つ雲は、
わが住むいほの煙なりけり。

實在は理想を伴ひ、理想はみな實現し得べきものなり。即時、安全に理想を實現するの難きは、恰も絶對無極に達するの難きがごとし。山路一つ

を越え來れば、高峰更にその前に峠つ。山嶺、前に横たはらず、人、理想に滿足することあらば、其の人は即ち精神薄弱にして、飽足せしめ易きものなり。人に理想あるは、其の無限なる天性の當然の結果なり。人に神性ある證據なり。

人たとひ理想の極度に達し雖きを知るも、須らく追求すべし。これ希望をして不斷の活氣あらしむる所以なり。

理想と實在といへる語を抽象的に使用せば、其の意相距る甚だ遠しと雖も、人生の實際に於ては、其の差異敢て大ならず。無限の思想も、卑賤なる事實と明白なる形態とに存し、賤が夕食を炊ぐ煙は、夕榮の雲となる。明智だにあらば、路傍一莖の野菊を見るも、之によりて造化の大工夫を解するを得べし。賢人は蟻垤を見るとき、愚者が富嶽を見るよりも、更に大なる眞理を曉る。

日本美術の名譽

我が國繪畫の表相に缺くること、何ぞ夫れ甚だしきや。啻に繪畫のみならず、我が國民が審美の思想も亦た然り。我が國の繪畫に現はるゝ男性美の典型を見よ—鼻長く、眼小く、眦は垂れて睡氣を催し、口は窄まりて決意を缺くものにあらずや。また女性美の表相を見よ。正にこれ生々の氣を有せざる人形のみ。人物畫も、非情畫と等しく生命を有せず。我が文學を讀め—月の光、萎るゝ蓮、曲りたる松を詠ずる、たゞ滑かにして愚なる歌什のみ。精神無く、靈氣無し。

海外の新紙が日本は美術に於て世界の冠なりと讃美するを見れは、吾人は相慶し、握手して之を喜ぶ。美術の精髄とは、若し優美なる線と筆力との謂のみならんには、吾人は當に誇るべき理由あるべし。されど美術が、

若し思想を發現すべきものならんには、我が美術は最高なる思想、即ち道念を表はすことの甚だ乏しきを憾む。抑ゝ日本美術は精煉せられ、限定せられて、單に線と筆力との範疇を脱せざるものとなりしか。—要するに日本美術は衰退して、單に人の技巧たるに過ぎざるものか。

京都の萩園

太陽既に其の炎威を收め、夏去り、秋來りて、悲しいかな、萩の榮え亦た盡きなん。月—哀れなる秋の夜の月は、うなだるゝ花に、露の珠をかづけ、其の影を宿す。高臺寺の庭、大極殿の園、かの燈火、篝火、烟火、そも何の用ぞ。此等眞に厭ふべし。これ月と萩との平和に仇する蠻夷なり。

里遠き山地、未開の曠野、岩石の小徑に生れし我が花よ。予が山丘、荒野、岩塊を知るよりも更に久知の聲もて、萩は其の幽居より一の使命を傳

へ、我が多問に應じて、點頭き搖ぎ、予は其の教訓を得て今や賢なり。

白晝、花園を訪ひて、黄、白、褐の胡蝶、また更に小なる紺蝶の花園に戯れ、枝も心ありてか、此の大氣中の動物を呼びて、樂しげに之を弄ぶを見る。また見る、多數の蟻群が、惚忙として莖軸を攀づるを。思ふにこれ餌食を漁るものか。虻蜂の族もまた萩の餌に飽く。此の花芳香なく、この花濃艶ならず。されど種々の生物は之によりて營養す。これ豈に自然の經濟にあらずや。而して彼女の人間に與ふる營養は天質なり。

萩は我等が現在の錯雜なる智慧の組織よりして、憧憬と名づくる軟絲を紡ぎて吾人に結び、導きて久しく忌却せる過去と、杳々不測の未來とに到らしむ。此の花の我等が思を惹く所は、忘れんと思ふ恐ろしの昔にもあらず、また來らん年の定めなき變化にもあらず。却つて "failings from us, vanishings" (我等より離れて行まて消え失せしもの)、また靈性の發展に干す

る廣大なる希望なり。また "the last of life, for which the first was made" (終を完うせんが爲に造られし始)なり。

萩の語るは慈母のごとし。我等をして母の膝に攀ぢ、其の頰に愛の始の片言を告げし昔に還らしむ。否、彼女は、我等が幼時よりも、尙遙かに遠き過去に吾人を導きて、吾人未だ此の世を知らず、吾人未だ肉體を受けず、未だ母あるを知らざりし其の昔に還らしむ。而して髣髴たる記憶は我に去來し、我のなほ或は月影の宿せる夜半の露の滴のごとくに萩の枝にかゝり、或は彼女の色恥づる莟より蜜を吸ふなる胡蝶のごとく飛びかよひけん、切億年の過去のその夢、茫として吾人に來る。

京都の一園に座して、この文を草する時、予は一女子の犬兒に戯れつゝ、萩の枝に半ば隱るゝを見る。この女子と此の犬兒と、また此の花とは、我が念々裡に合して、これ即ち目にこそ見えね、堅き大御手の計にして、ま

た其の守らせたまふ調和的生命の形像なることを思ふ。

性と行

貪夫も、多くの黄白を獲んがために寛大なるべく、懦夫も恐怖のゆゑに大膽なるべし。詐欺漢も、他を欺かん下心よりして、眞實を語ることあるべし。されば單一の行を以て、人の品格を測るは危し。弘法にも筆の誤あり。猿も木より落つべし。單一の行を以て人を判くは宜しからず。

人の行は主として其の品性を表象するものなるが故に尊しとす。善人の戯は、愚人のいと賢しき業よりも、吾人に教を與ふること多し。"to be" は "to do" よりも遙に重んずべし。汝、善なるべし、然らば汝の爲すところ皆善なるべし。曰はく、『就中此の一事を記せ。自ら己に信なるべし、さらば他人に信なき能はず』と。

一般教育と特殊訓練

英國の俚諺に『凡ての物の或もの、或物の凡てのもの』といへるは、蓋し移して以て教育の要領を語るべし。吾人は或る一事を選びて、之に精通するは可なりとするも、また知識的、道德的同情心が、人生の大局の凡てに觸るゝに足るだけに廣きものなるを可ならずとせず。一般的教育の人は、謂はゆる『萬づ屋にして、一つとして達せることなきもの』となるの危險あり。されど專門家は、また人生の大江より流れて、細溝に入るが爲に、同一の危險あり。要するに彼れの眼界は、諺にいふ井底の蛙のそれとなる。これに反し、一般的教育の人は、果てし無き知識の野に彷徨ひて、明かに是れぞと認むべき足跡を印せず。

一般的教育は遠心的なり。特殊訓練は求心的なり。この二者が正當なる

比例を保ちつゝ協力するによりて、吾人の心は、始めて平均に發達するを得べし。

靈魂永劫の尋求

燕來る、我等その何處より來るかを知らず。燕去る、我等その何處に去りしかを知らず。唯だ知る、その茫々無限の北より來り、茫々無限の南に去ることを。彼等は自ら去來する處を知るが故に、我等は其の智慧と其の知識とを羨む。ア、人智何ぞ小なる。人はただ知る、嚮に母胎を出でゝ、此の土に生れたるを。されど廣たり、漠たり、渺たり、茫たり、現在の生命の前後に横はれる永劫界に就いて、毫も知るところなし。吾人は何處か我が故郷なると、異しみ、訝り止むときなし。科學は地を指していふ、汝は彼處より出づと。宗教は高く指さして曰はく、彼處に在り、ア、靈魂よ、

汝が求むる處に就け、汝が九地の深きに沈まんも、はた九天の高きに昇らんも、これみな汝の心に任すと。

理窟刻み

我國の教育階級に於ける知識上の一大通弊は、理窟に過ぐることなり。不精確に立てたる論法は、不注意に調査したる統計と等しく危險なり。二者ともに譜して、以て百事を論斷證明すといふ。されど何れも眞理の一端をだに捕捉するを得ず。

理窟屋は、自作の論理を刻み、毛髪を割くべき刄を以て、偶像を彫り、之に與ふるに、フランケンスタインの靈魂を以てするものなり。

自制

曾て支那と戰うて吾人は赫々たる勝利の榮冠を獲たり。今や露西亞を膺懲して、西邦みな愕然たり。されど至大の勝利は、なほ今日以後に存す。吾人は自己を征服するを得るか。この最後の勝利は、眞に我國をして、雄大ならしむべきものなり。鮮血を濺ぐこと無き戰爭は、至劇至難なり。最も崇高なる勝利は、靈劍を以て無象の敵に勝つにあり、其の勝利者は、無限大の賞讃、勢力を宇内に博すべし。

（明治三十六年十一月）

天賜の用

富人の財貨に陋なるを見れば、予は寧ろ貧苦を尙ぶ。學者が知識を衒ふを見れば、予は寧ろ無智を榮とす。强者の流連、荒暴するを見れば、予は

寧ろ羸弱なるを喜ぶ。予は貴き事のために用ひるを得んがために富み、智慧を曉らんがために教育せられ、大いに勤勞せんがために、强壯なるを得て、而して之を感謝せん。

感恩の念

偉大なる心は常に感恩の念に滿つ。これ能く他人の善美を覺るがゆゑなり。マーカス、オーレリウスは、其の『冥想錄』の冒頭に記するに、父母、教師また朋友より受けたる恩惠を感謝するの辭を以てす。彼が斯く感恩を告白するは、其の心量の無限大にして、他者の善美を吸收するを得たることを證す。他人の我等に與ふる害惡は、吾人が苦痛の一小分子に過きず。之を吾人の自ら生ずる害惡に比すれば、微小言ふに足らず。

隱れたる天使

天使は、隱れたる暗隅に在りて、或は靜止し、或は活動することを好む。予は彼を賤が伏屋にて見たり、憂に暗き家にありて、彼等と會したり。彼等の容貌は闇處に光を投じ、いと厚き襯衣の下に於て大いに輝く。彼は、基督を葬り、婦泣きて主を求めたる墓場に在りて、最も明かに己を現ぜり。彼はたゞ其の在るによりて、不幸悲哀の巢窟を變じて、至樂至妙の聖殿たらしむ。

人生の矛盾

人生の矛盾はあまりに明白なり。この故に吾人はこれを解釋せんとして失望し、不可思議說、厭世說に賴りて、果なき慰藉を求めんとす。また往

往人生をして貴からしむる所以のものさへも、之を厭棄するの陋に陷る傾向あり。吾人は自家思想の造物にあらずや。吾人は自個小世界の造物主にあらずや。

カント・ニウトン輩の偉大なる力をして、なほ困迷せしむる問題あり。この謎はその力强大にして、或は聖者を高めて靈覺、神通の域に登らしめ、或は罪者を驅りて飛禽、走獸の間に陷らしむ。是れ人をして哲人たらしめ、また痴漢たらしむ。

人とは社會上及び物理上、無數勢力の合成力なり。また多大數物の平均なりと謂ふを得べし。されど若し彼の瑣々たる妄想が、寡少の經驗と兩立せざるものあるを感ずる時、其の均衡は容易に攪亂せらる。

人よく其の大に達して、矛盾の根柢を支配する大調和を觀ずるを得よ。人よく高處に立ちて、人生の瑣々たる矛盾の事實より超越せよ。されど人つひに能く斯の如き高大境に到達するを得べき乎。

吾人は一人よく此の高處に到達したるものあるを知る。世俗は、一致を得たるものとして崇むれども、其の實、彼はエマソンの曰へるが如くに、愚人、小智の妖精たる、區々の思慮の煩はすところとならず、律法に遵ふこと嚴正にして、而も其の律文を打破するに躊躇せず、其の德毫も瑕瑾なくして、而も社會の度外者流と交はりたり。最も容易に斯人を誤解したるは、即ち彼の所謂美しき體面を重んずる輩なりき。

彼が人と物とを判斷するに用ひし標準は、世俗の用ふるものと其の類を

異にせり。人の造りたる律法は、人に於ては全きものなるも、彼に於ては空文なりき。

彼の大なるは、以て物の極致を悟るに足り、彼の秤は精密にしてよく平均を持するも、一端に全王國を置き、他端に一羽の雀を置くとも、決して其の均衡を失はず。

吾人の立場よりして、有限の眼には矛盾と見え、背馳と現ずるものも、一段の高處より觀ずれば、忽ち之に調和あるを認め、更に高きに進むと共に、いよ〳〵矛盾の少きを知る。故に吾人が、心的存在の一階より他階に昇れば、人生の矛盾は減じて、遂に神物の光明を捉へ、是に於て百事は解明せられ、爭鬪全く終り、差異みな完き調和に入る。

クリスマス所感

斯日の意義に就きて書かれたるもの甚だ多く、また斯日の感想を叙せるもの甚だ多くして、蓋し殆ど言ひ盡され、考へ盡されたるが如し。吾人は何等の新たらしき一語をも加ふる能はざるに失望す。されど予も亦た敢て聊か曰はんとする所あり。

クリスマスは、日其のもの貴きにあらず。史家は十二月二十五日を以て、人なる耶蘇の誕生日なることを承認せず。啻に基督の誕生日が不明なるのみならず、亦た彼の生れし年月すらも一大疑問にして、此の重大なる事實に關する歴史は邈として明かならず。されど耶蘇基督のごとき人物の現存したりしてふ大事實は疑を容れず。されば彼は基督教時代の初年と稱せら

るゝ時世の十年間に、何の日に於てか、現實に此の世界に誕生したるものならずんばあらず。されど年月其ものは、さして重きをなさず。之を年月の記念する事跡に比ぶれば、毫も眞價無く、謂ふにも足らざる小事なり。吾人が心の裡なるベツレヘムに於ける基督の誕生てふ一事の靈的價値に較ぶれば、人たる耶蘇が何の年、はた何の日に生れたるにせよ、それ等は殆んど言ふに足らぬことなり。ベツレヘムとは、『麵麭の家』の義なり。基督曰へらく、『我は生命の麵麭なり』と。クリスマスとは、卽ち天の使が、我等人類に大いなる喜の音づれを告ぐる其の日を指して謂ふべきなり。

ベツレヘムの小都會はまたエフラタともいへり、蓋し豐饒の義なり。ホーマアの誕生地たるの名譽を荷はんがために、希臘の都市はしば〳〵互に相爭ひたりといふ。基督は、ホーマアよりも遙かに偉大なり。されば彼を

生むべき吾人が心裡のベツレヘムは、洵にこれ、實り豐かなる眞のエフラタたらずんばあるべからず。

靈性の結ぶ實は貴し。されど其の中、愛より大いなるものはなし。智慧と知識とを結ぶの樹あり、正義、平和を結ぶの樹あり、富貴、安樂を結ぶの樹あり。されど基督の敎へし如く、愛の實は、基督の自ら懸りし彼の木にあらずんば結ばず。

予は大いに佛敎哲學を重んず。之に對する予の知識は極めて狹隘なりと雖も、予は其の哲理の見界の廣くして、洞察に深きことは、拉甸敎父または煩瑣哲學者の說く所に優越せるを認む。佛敎は心的、物的のあらゆる現象を說明せる、驚異すべき思想の系統なり。佛家の莊重なる論義、辯證は、

之を譬へば地平的、匍匐的、爬行的にして、一隅一隈、其の極小をも擧げて、悉く穿鑿せざるなし。佛敎は正しく人智の勝利なりと稱すべし。

單純なるかな、基督の敎。彼は何等の哲學系統を設けず、彼は科學を敎へず。彼は社會學の法則を說かず。彼の論理は曖昧なり。彼の政治思想は甚だ幼稚なり。されど斯の如く多くの明白なる缺點あるにも拘はらず、彼は何を成しゝか、また何を成さゞりしか。哲學上幾多の系統は彼の敎訓を基として起り、此の世の產みたる末子にして、なほ靑年の客氣と紅顏とに輝ける彼の科學は、なほ唯物的立場に在るも、是れまた二千年の昔、基督の說きし宇宙、人生の靈的意義を發揮するために補足するものたるの約束を有す。社會學については、基督は之が學說の前提たる人間の天性を說き示せり。彼の論理は、演繹法にもあらず、歸納法にもあらず。されど啻に

人の理性のみならず、また其の全き心身を説明するの力を有したり。その論理は正確なりき。彼が此の世の政治に重きを置かざりしことは怪しむに足らず。基督の主義は共和か、王權か、壓制か、普通選擧か、財産制限か、蓋しかゝる論究は到底盡期なからん。されど其の議論は果して人世に何の善益を成したるか。

基督が宗教上の教訓も、また等しく單純にして、辯證を要せず。健全なる者、また病めるも、尙僅に健康を有する者ならんには、何人と雖も、斯道を了解することを得べきなり。曰く汝、心に憂ふる所ありや、不安ありや、些か恥を思ふことありや、これ卽ち罪なり、悔い改めて之を去れと。これ卽ち基督が宗教の大趣旨なり。彼は意力に訴へて、智能に訴へず。思考する力よりも、寧ろ實行する力に訴ふ。吾人か其の範圍を地平的なりと

稱したる、彼の佛教の精巧なる哲學論に對し、之を以て直立的道德行爲なりと稱するを得べきか。

基督の神學もまた複雜ならず。彼は多辯せずして、確信の人悉く信ずるを得べきものを教へたり。卽ち父にして愛なる一つの神いますとの教なり。彼は神の存在を辯證するの勞を執らず、其の事實は彼に於て甚だ明瞭なりき。然り、吾人若し密室に入り、心裡に退きて、自己と語りて、神明の存在を認むるにおいては、此の時また論理も科學も其の要を認めざるにあらずや。

予は信ず、耶蘇基督の三教は、神の父性、彼れ自己の神性、愛の超自然力なりと。

基督の神性に就きては、異論、辯難甚だ多くして、我等の薄弱なる心ためめに大いに惑ふ。人は能く自家の知識の想像に過ぎざる言語を以て、有限なる理解力の及ぶ能はざる事物を捉へ、かくて自家の靈性を説服するを得べきか。ルイ、コサツス言へらく、言語は情界の憐れむべき通譯者なりと。吾人は之に附加していはん。言語は、靈界に於て一天國に於て一全く其の用を辯ずる能はずと。

ア、此の文を草する時、予は坐右パスカルが一書なきを遺憾とす。予の讀みたる人の中にて、パスカルは最も深く靈的生命の機微に通じたる人なりき。

一閃の思想

臺灣の蕃族は太古林中の巣居に在り、飛鳥を見て運命を判ず。世界の盟主たりし羅馬人も、また其の永遠の都に在りて、同じく之をなせり。空を翔る雲は、燒土を蘇かすの雨を運び、霎時吾人の腦裡を閃過して、出滅ともに迅速なる極微の想像も、吾人に齎すに重大なる音づれを以てすることなきにあらず。

島國根性

吾人の知力に乏しく、道心の誤れるを誹るに、往々『島國根性』の語を以てするものあり。是れ吾人の同情に缺け、知識の地平線に限あり、また世界觀の隘小なるを説明する常用語たり。啻に之が説明たるのみならず、ま

た吾人の缺點に對する、版木的辯解なり。而して此の語には二種の悲しむべき思想を含めり。其の一は、吾人の缺點を以て、地理的形態の自然の結果にして、到底免るべからざるものなりとすることなり。他は吾人が—予は各人、各箇を指す—自己の弱點に就いて頗る無責任なるものなりとすることなり。予はかのバックルに心醉し、またワーレスを誤解したる學者が、かゝる信仰を有することを非難するものにして、斯の如きは果して過てるものなるか。

島國の生活は、決して吾人の靈性をして矮小ならしめず。試みに小島の水邊に立つべし。—君よ、首を回して陸地に向へ—君の眼界は、小丘、群樹によりて遮らるべく、君の心は此の障壁の外に達するを得じ。されど君よ、海に向へ—渺茫無限の海—其の水面の地球を包圍する海洋に向ふべし。此の時、何者か能く君の眼界を遮り、何者かまた君の思想を限るべき。歴

史上の最大功業は、島國民の事業なり。希臘、以太利は事實上の島國なり。英國か、是れまた何ぞ言ふを須ひん。

キルヒョフ教授は、近時の一講演に於て、波浪は生命を賦與し、之が洗ふ沿岸の人民には多大の勢力あるを說きたり。彼はまた島國民の統一的勢力を述べ、また航海に要するが爲に工藝の進歩するを說き、航海者の間よりして、科學—特に天文學—の生れしことを曰へり。されど予は曰はん、海の人に齎し來る至大の賜は、靈性を濶大にし、丈夫魂を養成することなりと。

狹隘、褊固、猜疑、虛傲、誇大、頑陋および過度の名譽心、此等を有する所謂日本人の島國根性は、我が地理の生產物にあらず。人種學者中、若し此の根性の由來を以て、大陸的敎育、卽ち支那學問の影響なりと說明するものあらんには、予は卽ち其の說に首肯すべし。

平民道

武士道また稱して士道と云ふものは、人既に多く人を說けり。是れ我が國民道德の根柢なり、基礎なり、柱梁なり。されど時代は推移して、武士の品性を陶冶したりし其の道なほ存すと雖も、武士既に在らず。斯道や今の變化せる事態に、新たに適應せられざるべからず。斯道は平民化せられざるべからず。曾て社會の山巔、山腹を照らしゝ日光は、今や其の廣大なる山麓に遍からざるべからず。士道は形を變じて、平民の道たる民道となるべきなり。教育の進歩と共に、好戰の貴族的武士は去りて、平和のたなる平民は、陣頭に現れ來るべきなり。

教育の缺陷

我が政府が教育上に於いて施設することの多大なるは否むべからず。明治時代の教育法は、維新前の教育法を繼承せるものにあらずして、全く新軌道を取れるものなれば、其の事業の宏大なることも亦否むべからず。此の新教育制度の成功の過大なることも、亦否むべからず。蓋し今日の教育は人をして器械となすに成功せり。吾人よりして嚴正なる人格、正義を愛するの觀念を剝奪するに成功せり。一言にして曰はゞ、我が祖先が以て教育の最高目的となしたる品性を、吾人より奪ひ去ることに成功せるものなり。知識の勝利、論理の輕業、哲學の煩瑣、纖巧科學の無限穿鑿など、此等は只だ吾人を變じて、思索の器械たるに過ぎざるものとせり。果して然らば其の教育に何の益かある。フレーベル及びヘルベルトの教育法も、若

し此等が吾人の目にある眼鏡たるに過ぎずして、能く活ける器械たるにあらずんば、果して何の益するところかある。

吾人は知識を偶像として崇拜し、而して知識は情緒と提携するによりてのみ、善く高大なる眞理を捉へ得るものなることを忘る。潔くして汚れざる心は、顯微鏡よりも、はた塵塗れの書冊よりも、其の見ること更に明かなり。

予は信ず、人の衷心、聖なる處に神性ありて、此の者のみ能く宇宙間に祕める神靈を認識し、之を悟覺するを得るものなりと。物質界に於てすらも、高尚なる眞理は、假令ひ心とれを明覺し、眼これを洞察し得るも、其の覺知し、認識する所を言語によりて傳へんとせば、必ずや困難なるを感ぜん。科學と哲學とは、蓋し無限の長語を以て、此の缺乏を補はんが爲に來れり。

私見を以てせば、科學上驚異すべき發見は、皆其の發見の在るに先んじて、久しく人心に豫覺せられたるものなるが如し。語を變へて曰はゞ、科學は常に、人の豫覺の後に、遲々として追隨するものなりと。

其の始にはソクラテスの如く、洞察眼を備へ、高尚なる思想、清淨潔白なる心念を有して、靈智と親しく交はる人あり。之に繼ぐに、プラトーの如く、其の師の胸裡に雜然として存在したりしものを取りて、雄渾莊重なる言語に托するものあり。而して後、アリストートルの如き者ありて、先人が悟覺し、また感應するまゝに語りしものを取りて、形式と法則とに配列す。若しアリストートルにして、ソクラテスの如く、靈智に從ふことに忠實なりしならんか、また師の心に同情すること、プラトーの如くなりしならんか、彼の科學、哲學に於ては、毫も非難すべきものなかりしならん。されど彼にして、感應を犧牲としても、科學的ならざるべからず、靈的內

省を失ふとも、哲理的ならざるべからずとするものなりしならんには、彼は果して人教—全き意義に於ての人教の最大産物なりや、これ甚だ疑ふべきなり。

我が教育は全力を竭くして、靈性を犧牲とするアリストートルの業をなしたり。これ一椀の羹のために、長子の權を鬻ぐものなり。これ我が民族傳來の最善物に不信實なることを示すものなり。これ單に歐洲教育の猿眞似なり。これ即ち吾人が今日認めて優者とする民族に對する謬見—甚だしき謬見より生ずるものなり。彼のアングロ、サクソン人種が雄大を致せる所以のものは何ぞや、其の發達の祕訣は何ぞや。

人はアングロ、サクソン人種に許すに、最大または最多の哲學者を出したる事を以てせざるべし。事實は、科學が彼等の中に於て最も進歩したることを證せず。また英文學は、其の富を擧ぐるも、決して希臘文學に優れ

りといふこと能はず。若し或る點に於て、英國哲學及び英文學が、大陸又は亞細亞の科學、哲學に優れるものありとせば、則ち此の知識顯昭の裏面に深因の存するものあるが故なり。その原因は之を一言にして擧ぐるを得べし。曰く品性（キヤラクター）なりと。

キツドは、其の民族の偉大なる原因は、平民的なる日常道德を有して之を行ふことと、勤勉にして、眞理を愛し、且つ正直なることとにありと主張せり。これ妥當の說にして、またデモランが、此等を以てアングロ、サクソン人種の雄大なる所以の特質なりと說明せることも、また大いに其の理由あり。

一種の感情家の曰はんが如く、日本は、國を擧げて一個の美術國たらしめ、國民をして、此の國土の如くに美しからしめ、吾人の運命をして、世界他邦の玩具ならしむべきものなるか。さらば吾人は子孫の教育に於て、

祖先の嚴正なる性格を繼ぐことなく、典雅魂を奪ひ、麗美心を迷はすべきの法を以てし、斯くして吾人をして、今や衰境に陷れるラテン民族の如くに美ならしむるを以て可なりとせん。

されど今の時は或は醉夢に耽り、故は拙劣なる歌を唸り、また利己のために勉學に專らなるべきの時にあらず。ア、『北より吹き來る風は、吾等が耳に鳴り轟く武具の響を傳へん』。益荒武夫の雄猛心は、吾等が父母の遺せる最も尊き賜なるぞ。吾人は近く文相が訓示して、人格を作るを以て、我が教育の大方針となるべしと曰へるを聞く。此の思想が將來何程に發展し、幾許の實效を齎し來るべきか、吾人は皿大の眼を張りて之を注視せんとす。

（三十六年三月）

治亂の心構

懶惰、耽眠も暫くは樂しかるべしと雖も、其の魔力は忽ちにして盡きなん。此等は其の中に自滅の因子を藏するがゆゑに、怠惰の誘惑は久しかるべきものにあらず。人は起きて働くにあらざるよりは、遂に能く幸福なるを得ず。心身は働かんが爲に造られたるものなるを以て、活動ありてのみ、始めて其の自然に合す。平和の安逸―その懶惰、耽眠―は暫く吾人をして安息せしむべし。されど習慣以上に、より長く吾人を眠らせんことは、到底其の能くせざる所なり。

武士が治に居て、亂を忘れざらんことを誡とせし時世に在りては、夜の安息を奪はれ、霜寒き晨、身を武藝に委ぬることも、敢て耐へ難き業にあらざりき。運動の人をして陽氣ならしむるあり、而も周圍のみな興奮せる

とき、自から一層の活動をなさんとするに、殊更に刺激を求むるの要あらざりき。自己の活氣に加ふるに、他人の奮躍を以てす。彼は其の生々たる精神を持續して、自ら己を快活ならしむるを得て餘りありき。

治に居て亂を忘れざるよりも更に難きは、戰爭の危機に處して、平和を思ふことなり。平和は、吾人が存在の理想たることは、言ふまでもなし。戰爭は目的にあらずして、平和の手段たり、その道筋たるべし。國家竝に個人の生涯に於いて、平和は常道なり、戰爭は異例なり。平和は存在の常態にして、戰爭は、たゞ此の常態を確立せんがための一時の手段なり。然るに青年は、戰爭てふ一時の激昂の爲に、恒久なる平和の利益を忘却するの傾向あり。戰の嵐が、吾人の耳に響くに當りてや、精神の踴躍を檢束、抑制せんとするには、多大の勇氣を要す。戰勝の報を聞いて、なほ沈鬱なることは、理性も之を許さず、況んや情緒をや。否！否！戰爭、其の利あ

る毎に、吾人をして歡喜せしめよ。萬歳の聲を叫んで、大空に鳴り轟かしめよ。されど、能事此に了らず。

戰勝の齎す凡百の結果の何なるかを思へ。圓錢を以て價値を量ることの如きは、予之を語らじ。されど吾人は死者と、其の遺族に齎し來る結果とに就きて一考するなき能はず。最後の勝利の後には、經濟上、道德上、何等の結果を伴ひ來るかは、誰しも之を豫想するを得ず。これ等は實に戰爭の最大結果にして、青年は皆これが責任を感じて、その爲に備ふる所なくんばあるべからず。

我が國青年に訴ふ。汝は號外賣の鈴聲を聞くか、必ずや報道を得て之を精讀せよ。海陸の戰況を暗知せよ。地圖に點して、何處に戰爭ありしか、陸兵は何處まで進軍せしかを記せ。幾許の負傷者あり、また幾許の死者ありしか、これが記錄を忘るゝ勿れ。報道が特に名譽の事ならんか、汝の肺

中の空氣のあらん限りに喊呼せよ、汝の足をして舞躍せしめよ。されど汝の順次の來らん時に及びて、善き戰を戰はんがため—その戰は血を流すこと少くして、而も一層劇烈なるものにもあれ—高尚なる戰を闘はんがために、頭腦更に明瞭に、決心更に鞏固にして、日常の任務事業に盡すことを忘るべからず。戰後には、至剛の兵士の力をも無みすべき甚大なる任務生じ、其の時戰ふべき敵は、銃砲、水雷の武器を有せずとも、かの露人よりも尚一層恐るべきものなることを覺りて、己が業務を守るべし。日露戰爭よりも、更に多大なる名譽戰を戰はんがために、充實せる勢力を藏蓄せよ。來るべき戰のため、心に戰略を潜めよ。また紙上の空戰を以て心を煩すなかれ。學術、知識の凡ての切實なる經驗を以て自己を守れ。精神の武器を鋭利ならしめ、其の時のまだ到らざるに、先づ之を濟すことなかれ。さらば假令ひ久しからずして、汝及び汝の祖國に何事の起らんも、汝は既に之

に臨むの備あるを得ん。

東洋の米國主義（開國五十年紀念）

彼の『實業界のモルガニゼーション』てふ新語と相竝びて、また『世界の米國化』てふ語は、廣く世上に行はれ、ステッド氏はこれに就きて的確なる說明を與へたり。凡そ此の語の意味する風潮其の者は、既に人間活動の多方面に於て見るべく、また聞くを得べきものとなれり。世界の風潮が、米國的なるの事實は蔽ふべからず。實業、教育、社交及び人々の思想に於て之を認む。されど五十年前、ペリーの我國に來りて其の門戸を叩きし時に當り、世界の米國を見ること、だゞ茫漠無限にして不毛なる大荒野の間、獰惡なる蠻人が斧鉞を携へて頭皮を獵り、此處彼處より淸敎徒が鼻聲にて聖經を朗讀する聲の洩れ來る、粗木造の家竝より成れる小市街のある地な

りとしたりき。今もなほ歐洲の田舍にては、紐育は印度人の部落なり、市俄高は獸皮商人の市場なりと思ふものあり。されど知らず、米國の小麥は彼等を養ひ、米國の綿は彼等に衣服を給することを。

僅に二十年前までは、米國を以て文藝、學術の國なりと夢想するもの殆ど絶無なりき。吾人は二三十年間に發達したる彼の國都市が、古代美術は勿論、近世の大作品をも蒐集すべしとは思ひがけざりき。吾人はミューズの神は、俗界の幸福を慕ふことに熱心なる彼の國民を衝動せしむることなかるべしと信じたり。哲學は平民主義を蔑視すべしと考へたり。されど事實は其の反證を提げ來り、今や大共和國は、人生の光彩たるべき凡百の賜を享け、全世界を其の有となしつゝあり。

日本は合衆國の前進を拒む能はざりき。幾度か他國の要求を退けたりと雖も、時滿ちて、米國が世界的精神を代表するに及ぶや、吾人は最早之を

拒む能はざりき。彼の時若し强ひて之を拒みしならんには、假令ひ滅亡せずとも、甚だしき災禍を招きたりしなるべし。吾人は、我が國運の重大なる變化に逢遭する毎に、神明の祐助を被ること多きを誇る。さりながら五十年前、ペリー遠征艦隊の、我が國海岸に來りし時に於けるが如くに、未だ曾て攝理の御手の導の著しく顯はれたることはあらず。此の時にあたり、我が國船は始めて世界の潮流に乘り出だゝ、爰に吾人は現世界を形成するの一要素となれり。露國の愛好すべき皇帝と、その哀々呼號する外交家とは、我邦が現世界にも亦新文明にも屬するものにあらざることを證明せんと試みたり。而してプルツクス、アダムス氏は、業に已に日本は新大帝國—政治上の主權者の治むる帝國にあらずして、制遏すべからざる勢力及び感化の治むる新大帝國—の先鋒なることを說いて、而して露國が日本に對し、此の非難、讒誣をなすべきを明白に預想したり。

吾人は絶東にありて、米國理想—また之をアングロ、サクソン的思想と云はゞいはん—を代表す。吾人がアングロ、サクソン國と同盟するは、晉に之れが一海權者たるの故にあらず。自由は全海洋上の權力よりも貴し。露國や、彼が同じくアリアン種に屬し、而して吾人の蒙古種に屬することを論據として、吾人をアングロ、サクソンの朋友より離間せんとす。然るに彼は血統が心の親みを結ぶべき唯一の絲にあらざることを忘れ、兄弟にも優りて親しき友人のあるものなることを忘れたり。

凡そ米國の感化の及ぶところは、野蠻なる印度人、若くは黑人の間にもあれ、半開の布哇島〻若くは比列賓島にもあれ、はた絶東なる異種古代の文明の邦土にもあれ、其の感化は主として教育的なり。其の教育的感化は、非教育的なる政策を動機とする場合に、尙それより生ずる必然の結果たるあり。コロンビアや、彼女は往時よりして、世界に比なき偉大なる教師な

り。國家を開發するの道と、人間の最善を啓導するの法とに通じ、且つ其の能力を自覺す。

ペリーの日本に來るに先だつ數年、クリーシーは甚大なる變化が、太平洋に於ける米國勢力の進歩に由りて生ずべきことを預言せり。而して此の英國史家よりも數十年前、既にクローフォルドは米國が日本、支那を開導すべしとの預想を語り、シワードはまた『太平洋と、其の海岸、其の島嶼及び兩岸の廣大なる地域とは、世界の大未來に於ける出來事の主要なる舞臺なるべし』と預言せり。

此等の預言は、皆半世紀の短日月に於て、米國の手によりて全うせられたり。されど米國の方針は、輓近、彼國の外交學泰斗フォスター氏によりて言之に對する滿足の情は、最多の實を結び、而して米國民の明せられたり。氏は其の新著『東洋に於ける米國の外交』に於て曰へらく、

『日本人の智慧、不撓の精神及び愛國心の勝利を認め、且つ此の國民を警醒して自ら懷抱せる高尚なる理想に進ましむるの仲介者となり、また彼等が國家の刷新及び獨立のために、多年の苦闘をなすに際して、彼等の忠言者となり、友人として、彼等を補助したりと思ふことは、米國人の特に喜とするところなり』と。

兩國の岸を洗ふ波濤を名けて、太平と稱するは吉瑞なり。ア、此の二國民を結ぶ友情の絲のます〳〵緊密なれかし。

今歳吾人は日米訂交の金婚式を祝す。而して今より二十五年を閲して、金剛石祝典を迎ふるの日に於て、吾人と吾人の子女とが、啻に兩國間の親和を喜ぶのみならず、また冀はくは他の邦國をも招來して、平和友情の福祉に溢るゝ我等の祝宴に列せしめんことを。

（三十七年四月）

二種の尺度

吾人は二種の尺度を有すべきなり。一は以て己れの深さを測るべきものたるべし。隣人を規るの尺度は短小なるべく、己を量るの尺度は長大なるべし。金尺は他人の用、鯨尺は自己の用なるべし。隣人の德にして、我と等しきものあらんか、金尺幾寸と量りて、之れを敬し、之を愛すべし。されど自己に存するものは、鯨尺もて量り、常に我が寸尺の稱するに足らざるを覺れ。

日本の作法習慣

國人の作法、習慣は外來旅客、竝に在留外人の過賞するところなり。然り吾人の作法は、その優雅なること、高等文明人中稀に見るものなきにあ

らず。されと同時に、媚言、諛辭を聞いて聾瞽し、重大なる缺點を知る能はざるものとなる勿れ。此等の缺點は過眼の觀察者も尙之を認め、殊に多年の在留者は、日本の社交形式中、全然無意味にして、甚だしき虛禮あるを觀破せり。

封建の社會組織が瓦解すると同時に輸入せられし外國思想、歐羅巴の慣習、亞米利加の禮法は、現在の國民をして、自國の作法を知らざる國民たらしめたり。作法なきは無作法なり。吾人は讃美せらるべき何等の理由をも有せず。さらば何ぞ之を受くるに値せんや。外人が我等を賞するを聞くときは、彼等の讃賞するものは、卽ち明治以前の敎育の遺物なるを知れ。現在の日本は作法、習慣の點よりいへば、正しく野蠻、猥雜、無作法、粗笨の時代なり。吾人は法制の改革を遂げて、法治國を成せるを誇り、法治國は最高の政治組織なる如く稱す。法治政府は、文明の一證なり、その成

素の如何は、國家の文運を量る。されど法律によりてのみ支配せられて、而して法典のページに記されたるものに優りて、他に有力且つ高大なる制裁の存することを感知することなき人民は、全然無價値なり。作法、習慣は法律を作る材料なり、一國民の倫理的狀態を表現するものなり。然るに日本は、法治國となるに急なりしため、この自然の順序を轉倒して、法律よりして倫理を產まんことを努む。法文に觸れざることは、何等の行爲も無害正當なるものと通用し、たとひ嚴重にいへば、必ずしも正しき事なりといふを得ざるも、なほ決して惡しき事にはあらずとせらる。

列車內にて、予が側に坐せる斯人を見よ。衣服は臭く、煙草は臭く、蠻聲高らかに新聞を讀むは、音樂の法則に反す。床上に痰唾を吐き散らし、座席に蜜柑の皮を剝ぎ棄つ。彼は立ち上れり、而して殆ど裸體となりて、寢衣と着換へたり。酒を呷りて、予が面に臭き息を吹きかく。此等の行爲

は、現に帝國六法の一箇條にだも觸るゝことなし。この故に彼は何等の害惡を行ひたりとも感ぜずして、たゞ自己を愉快ならしむるために、其の權利を行ひたるものなりと思ふ。彼は實に法治國の罪人にあらず。されど彼は紳士社會に於て、罪人以上なり、貴女の社會には宥すべからざるものなり。今の國人は法律を偏重し、ために彼の鋭敏にして、また如何なる法典も及ぶべからざる底に高尚なる、男女の修養、優雅の品格、氣高き本能等に對する尊崇の念を缺くものなり。

禮は德なり、靈性の一特質なり。禮は形式にあらず、身振にあらず、姿勢にあらず。卽ち他愛心の發現にして、其の遠因は愛なり。作法より禮を去らば、則ち褥禮となり、虛飾となる。

予は學校の男女生徒に作法を敎ふることは、毫も異論なけれど、若し作法その者を目的とし、之れ自ら貴きものなりとして敎ふるは、敎育上甚だ

賤しむべきなり。

作法の價値は、『德の影』たるにあり。フオスターの曰へるごとく、作法が靈魂の一部分なることは、恰も文體の天才文士に於けるが如くなるべきなり。

態度最も高尚に、作法最も優美なりとも、心奥若し眞德の存するにあらずんば、彼は尙未だ田夫、野人の域を脫する能はず。堅實なる道德を備へて、作法に缺くるも、而も紳士たり、偉人たるを失はざる者あり。かゝる人は實質を有して、暗影なきものなり。彼は中天に懸れる太陽の光明中を行く人なり。其の粗雜なる擧止は忘却せられ、其の社交的缺點は留意せられず。その缺點は其のより大いなる天質に蔽はれ、殆ど見るべからざるものとなりて消失す。

禮儀三百、威儀三千も、千百の『爲すなかれ』も、チエスターフィールド及

び小笠原流の千百の訓誡も、之を『詩經』にいへる『思無邪』の教に比すれば、畢竟半文錢の價値だに有せず。

良心の賞揚と非難

人あり予を賞揚す。予卽ち密室に退きて自問す、『我聞くところ、此の讃辭は、是れ汝の聲なるか』と。我が靈魂は卽ち沈靜し、極めて甘き詔諛も、予をして漫りに傲然たらしめじ。人あり惡罵の語を盡して我を責むるや、予は猛然として之に對し、かくて我が衷心に問ふ、『我聞くところ、此の非難は汝の聲なるか』と。こゝに於てか勇氣予に生じ、恰も十人力を得たらんが如く、彼が舌鋒いかに鋭利なりとも、以て我が靈魂を害する能はず。

黃禍とスラヴ禍

異しむべし、かの歐洲―少くとも宇內の此の區劃に住する不祥不吉の徒が、怪しき蒙古人再寇の夢魔に魘はれんとは。更に異しむべきは、これが實現を信ずるものありて、而も之に附和雷同する盲目者流の少からざることなり。

由來予は泰西の民を以て、自信力に富み、制度、文物に信賴すること堅固にして、また之が根柢をなせる主義精神に依賴すること、甚だ深厚なるものなりと信ぜり。予は屢〻歐洲諸國語の記述せる書籍が、歐洲社會の不易鞏固なること、また謂はゆる基督教的文明は、永遠不壞なる眞理の盤石を礎とするものなるを論述せるを見たり。然るに此等言論は、單に大言壯語輩の駄法螺なりしか。歐洲の民は、其の文明の結構脆弱にして、亞細亞

民族の一國の爲に容易に轉覆せしめらるべきを信ずるか。咄、『黄禍』の惑說は、畢竟愚說なり。

予は黄色人種の血統を享く。されど予は血液以上に粘着力を有する液體あるを知る。『兄弟よりも信ずべき知己も亦これあり』と。記すべし、此の語が彼の褊狹、狷介なる猶太民族の一人なる、賢哲ソロモンの口より出でしことを。かの血統、種族の親和力を以て、最も强力なる結束なりと信ずるの徒は、蓋し自ら欺く者なり。試みに歐洲てふ棋盤に臨んで、スラヴ族が兩拉甸族の駒を押分けて、佛伊を離間するの狀を見よ。チュートン族が、ゴール族に抗して、ローマン族に合するの狀を見よ。英佛が異教國の土耳其と結びて、基督教國の露西亞に抗するの狀の見よ。ア、予は飼犬の、我が爲に他犬と決鬪するを見たり。吾人の同盟者たる犬は、其の同屬、同類に對するよりも、吾人に對して更に忠實なり。人間に於ける信義の德は、

犬にだも及かざるか。

人往々ゲーテが『血は特殊の液體なり』との語を引用す。之を引用するにあたり、須く彼が此の語を以て、惡魔メフイストフエレスの口吻に上ぼせたるものなることを記憶すべし。『黄禍』とはメフイストらしき言葉なり、『常に事物を否定する靈魂』の語なり。魔王の造語なり。また記憶せよ、此の假想の題目を象りたる彼の有名なる繪畫は、メフイストが國民の一人の筆に成りたるものなることを。

若し玆に全人類に超越して、善良なる秩序と律法とを破壞し、人間界最良の社交的本能と、其の要求とに全然背反するの途に出でて、其の優越力を利用する民族ありとせば、其の民族は實にスラヴ族なるべし。予は之を事實に徵す。露國史を繙くの時―ロマノフ家の破廉耻にして、血に汚れたる記錄は措いて問はざるも―彼の國の政權統治力は、吾人をして果して人

類の福利を增進すべしとの希望を抱かしむるものなりや。

其の領土の一小部分が、西歐に隣するのゑゆによりてのみ、露國が西歐的外觀を呈するは、日本よりも一層有利なる地位にあるものなりと雖も、ツアール帝國の內情を發き見よ、果して那邊か歐洲的なりや。スラヴ帝國が、歐洲の一部なり、基督敎國なりと稱せらるゝ所以は、其の血統に由るにあらずして、其の領土の位置に由るのみ。露人が自稱して"White men's burden"（白人の重荷）を分擔するといふものは、寧ろ一笑に値す。ヘーゲルは、歐洲の歷史を概括して、自由思想の進步的發展なりといへり。露國史は、果して何程までヘーゲルの定義に適へるか。由來、露國は全力を竭して、地球表面より自由を拭ひ去るを以て主義とす。曰く韃靼人の踏むところ草生ぜずと。而してスラヴ人は、彼等が足を立つる處、卽ち自由の滅亡するを以て其の誇りとす。されば汝、『黃禍』を憂ふるの徒よ、蒙古寇と

スラヴ寇とその何れを擇ぶものぞ。汝等は自由無くして草ある處と、草無くして自由ある地と、其の何れを是とするものあるか。予はモンテネグロの一民族が、磽确不毛の地に住し、自由を愛して、幸福、勇强なるを見たり。ア、牛馬のみ、芻草を以て自由に代ふ。

黃色人種は果して歐洲の文化を受納する能はざるものなるか。果して然らば匈牙利と露西亞と、その何れか能く『歐洲的』てふ語の眞義を發揮したるか。匈牙利の現狀は、白人種以外の民族も、また歐化せらるべきものなるを證し、而してまた歐洲の活力眞に雄大ならんには、異分子の混同あるも、制度上、思想上に危殆を生ずること無きは勿論、却つて一層豐足充實せらるべきなることを證して餘あり。眞に卓絕せる文化は、人間を差別せず、最奸の徒をも善導し、一人種をして達せしむるところ、他人種をしてまた達せしむ。人類學てふ遊藝的科學を過重すること勿れ。博言學も、人種學

も、未だ其の極度を得たるものにあらず、その進歩のほども疑はし。然るに世上、此等科學の薄弱なる前提より速斷して、歐亞、白黄、耶佛の間には超ゆべからざる障壁ありと信ぜしむるもの少からずと雖も、吾人は之に反し、烏拉山には幾多の溪谷、隘路ありて、歐亞の人互に容易く此の山嶺を越え、また裏海の水は東西に通ずるを知る。

人間の思想に白人、黄人の二系統あるを主張するは、たま〳〵以て白人の價値を傷つくるものなり。獨帝の有名なる繪畫は、此の帝王美術家の信念の薄弱なるを證し、帝は歐洲の有形勢力にして聯合せずば、ために或は基督教の佛教に屈服するに至らんことを危懼するに似たり。何ぞ夫れコンスタンチン大帝の絶叫に似て、而も相異なるの甚だしきや。獨帝はクルップ砲を基督教に差向けて、"Conquer by this sign" 此の徽號によりて征服すべし)と命令し、彼に從ふ信仰の防護者は、異口同音『アーメン』と唱ふ。厲

聲一番『黄禍』の警醒を與へたる、彼のホーヘンツオレルン氏は、其の繪畫を以て、基督教國の結束と活力とに對する、自家の信仰の堅固ならざることを自白したる者なり。吾人は日本進歩の將來を信ずると共に、また歐洲文化が我が文化に卓越せることを信ずるに吝ならず。隨つて之を採用するの價値大なるを信ず。

予は重ねて云ふ、『黄禍』說には根據無しと。其の所以は、第一に、日本は誠實に泰西の優越を確信し、第二に、吾人は眞に秀でたる文化が、凡ての人類の共有財産なることを信じ、第三に、歐洲文明は、金城鐵壁を築いて、亞細亞的侵入を防ぐものなるを知る。予はまた重ねて言ふ、若し歐洲及び世界の他境が、優力なる一人種の威嚇を受くることありとせば、その勢力は卽ち他國民を奴隷とすることを標榜せるスラヴ族より來ると。

感恩

人往々他の恩義を忘るゝこと多く、却つて他の爲に盡しゝ細事をも誇張するの念あり。吾人を助けて盡力したる恩人の犧牲行爲を考ふる無きに反し、吾人は自己の他に與へたる微細の好意をも數へ上ぐ。吾人は、社會は自己に對して何等かの負ふところあるものなるが如く思ひて、他人の親切を受け、而して何人も吾人に對して要求するところ無き筈のものなるが如くに思ひて、嚴重なる義務のため、已むを得ざるにあらずんば、決して他人の爲に盡すことなし。

予は曰はん、吾人は二種の尺度を有すべしと。一は以て他人の德を擴大し、一は以て自己の德を縮少すべきものなり。

人生の不幸は、多く自己と他人との行爲を量るに、おの〳〵不適當なる

尺度を以てするに原因す。

吾人は世人の背恩を恨んで、自己の罪を曉らず。吾人は他人を非難するに、吾人が彼等の爲に盡しゝ善事を忘却するを以てすと雖も、安んぞ知らん、吾人も亦た忘恩者の數に洩れざることを。然り吾人は往々特に友人の厚意を要求すべき何の權利もなきものなる事を忘る。小兒が一杯の冷水を吾人に與ふることあらんに、小兒は吾人に對して負ふところあるが故に、斯くすと思はんは愚なり。路人が一閃の眼光に微笑を湛へて、吾人に會釋することあらんに、吾人は人間社會の尊敬を受くるの權利あるが故に、斯くの如しと思はゞ、是れまた一笑に値す。

我が將士が萬死を冒して奮鬪するにあたり、吾人或は之と全然相關知せざるものなるが如く看做し、或は吾人は軍隊を維持するが爲に、幾圓の租稅を拂ふものなるが故に、兵士の生命に對して權利あるものなるかの如く思

はんか、忘恩これより大なるはなし。吾人は祈禱と同情とを以て、彼等が犧牲の行爲に報い、涙を濺ぎて、彼等の流血に酬ゆるに務むべきなり。

吾人は、僕婢の最卑なる勞働にも、之に精神的因子あり、そのものは賃銀を以て償ふ能はざるものなることを知るべきなり。況んや我の彼に報ぜずして、彼の我に盡すは、我に加ふるに恩德を深念すべき責任を以てするものなるをや。

何種の勤勞も、之に對して其の値を悉く償ひ得べきにあらず。試みに汝が他より受けたる一日の恩德を借方に算し、また汝の辨償したる一毫一抹を貸方に記入べし。而して靜思一番せば、汝は未濟の額の甚だ多きを知らるべし。

信切の情、同情の笑、此等は金錢を以て量るべからず。能く之に償ふの道は、卽ち感恩にあり。

秋思

みどりなる一つ草とぞ春は見し、
秋はいろ〳〵の花にぞありける。

日輪は絕頂を降れり。夏日の炎光は減じて、秋天は灰色を染めたり。百日紅は一つづゝ散りて、一百日の勤勞その終りに近づきたるを告げ、枝上の蟬噪衰へて、草間の蟲聲哀愁を增す。豈に一葉落ちて天下の秋を告ぐるのみならんや。物音、物姿、皆然らざるなし。秋は來れり、詩人の愛し、感情家の賦ふ彼女爰に來る。

夏日予は絕えず彼女の來るを待ちたり。予は少年にして彼女を愛するを知れり。彼女また知るべし、予が夏の去りゆく門邊に立ちて、彼女の歸來を迎ふることを。彼女の予を訪ふこと既に四十餘秋、常に人類を樂しまし

むべき花卉を滿たせ、人類を養ふべき食餌に溢るゝコルヌコピアを携へて來る。

我が秋は年ごとに齎し來るに、食物、花卉は固より、尙他多くの果實を以てす。聞け、彼女が衣ずれの音靜かに來る。彼女は近し。予は再び彼女が徐に『君なほ人類に伍して、玆にありや』と問ふを聞く。予答へて『君見よ、予なほ生と共なり、たゞ予は常に君去るとき、令弟冬君來りて、予を拉し去らんことを恐る。さりながら予は曩に君と別れたる處に止まりて、なほ此にあり』と。秋は予を睇視して、過ぎし幾年か、予に問ふを常とせる一事を繰返して、『君の頭髪は去年見しときよりも、數條の白きを加へたり。君の靈魂また潔白を加へたりや。君は齡を加へたり、君また智慧に老いたりや』と。予は答ふる能はず、面を蔽ひて只管に恥づ。

明年彼女の再來せん時、予は彼女に告ぐるに價値ある答を以てし、面を蔽ひて恥づるなからんことを期せずんばあらず。予は善德に進み、純潔なる思想を抱き、高尙なる行爲に勝れんことを努めざるべからず。

友よ、學びの友よ、夏日の炎威は我等を去れり。業務に適せる時は近づけり。疎懶は遁辭をゆるさず。勉めよ、熱心に、眞面目に働くべし。人みな秋の哀をいふ。されど如今同胞の滿洲原野に殊死奮鬪する時に際し、この哀愁を樂むは、驕の沙汰なり、豈に其の咎なからんや。我等をしておのおの與へられし業に就かしめよ。

數旬の休暇を利して靜養せる吾人は、今や明一層の眼光を以て、其の責任を觀ずべき時なり。春日の初には、なほ漠然たる義務の如く感ぜられし

ものも、今や明確なる形容と、判然たる色彩とを備ふ。今年の始、吾人は戰雲蔽ふことなきを希ひしも、今や吾人はこれが鎖す所となれり。吾人は平和を愛し、平和を友とすと雖も、吾人は戰爭、特に現時の戰爭の結果を閑却忘失すること無かるべきなり。吾人は事に臨みて丈夫の態度を持し、大凶の結果に抵抗するがため、自ら備ふべきなり。

秋の齎すものは啻に食物花卉のみに非らずして、また甚だ嚴格なる義務、職分を以てす。耳ある者は聞け、聞くものは之に從へ。

（三十七年）

淋しさ

淋しさてふ恐ろしの感じよ、吾人皆これに悶え、時に悶えざらんとするも得ず。淋しさの念は、無人の境にも來り、群集喧擾の間にも來り、繁忙の間にも訪れ、拱手休息の時にも訪ふ。林中、畦畔にも來り、公會にも、市

場にも、吾人の足跡に追隨す。また傍人悉く歡樂する時、吾人を襲ひて苦痛を與ふることあり。淋しさの念は、中宵予を驚かし、また白晝予を捉ふ。淋しさは吾人を去ることなくして、而も吾人の之を去らんとするは不可なり。靈覺の火の消えざる限り、時に淋しさの念の襲ふところとなるを免れず。深山幽谷ならずも、淋しさに居て、淋しさと語るに可なり。淋しさは靈魂の一狀態なり。靈性に死してのみ、だゞ能く之より免るゝを得ん。

淋しさは、靈魂が其の偉大を現示する一端なり。吾人の衷心に、塵世の俗務が沈黙せしむる能はず、滿足せしむる能はざる神性の存在することを實證するものなり。吾人が自我と、有情、非情の伴侶とに對して滿足する能はざる事を表明するものなり。肉體の命令、束縛に對する暗默の反抗なり。其の正當なる權利と、神性の先天的資格とに對する憧憬なり。

偉大なる靈魂はしば〳〵淋しさに煩悶す。靈魂の大なるに隨ひて、此の

煩悶も亦大なりと云ふも、敢て過言にあらず。

人生の或る時代、殊に青年が成人の域に進む時代—換言せば、靈魂及び肉體の最も急激なる變化を受くる時—に於て、淋しさの念の襲ひ來ることは最も多次にしてまた最も深甚なり。これ青年が世路の方針を定むべき時なり。此の時に於て、彼等は世路の岐點に立つものなり。然るに或は煩悶より免れんとして、身を快樂淫逸に委ね、良心の靜けき私語を、三絃の噪音に葬りて、自己の偉大の最初の暗示を拭ひ去り、人生の喬木を萠芽にして剪除するものあり。

淋しさの酒杯のいと苦き滓を飲み干して、一滴だも餘すなかれ。汝之を感ずること最も甚しきは、即ち靈性の發育し、活力の生長し、思想の成熟しつゝあるときなり。靈魂は其の發達に必要なる階段として、淋しさの念を甘受するの備なかるべからず。之をして靈魂裡に呻吟せしめよ。之を賊

ふなかれ。之をして靈魂を訪れしめよ、遁すなかれ。カルバリ山に向ふの勇氣は、ゲツセメネの園にありて奮起す。此の勇氣なくんば、人類は向上する能はず、靈魂は自由なるを得ず。

哀吟

陽氣なる歌、無心の笑は、女の喉、女の唇より發す。予は悲橋風頭の垂柳を吹いて苦吟するよりも、更に悲しき哀歌を聞くの思あり。

美服に隱るゝ彼女が憂苦は幾許か多き。嬉聲笑語の陰に潜めるその悲痛は幾許か大なる。その笑は、涙よりも明かに人生の苦痛を語り、その歡樂は哀愁を洩らす。彼女自ら遊興は憂を拂ふの靈樂にあらざるを知る。

彼女が滿腔の嗚咽一度びその唇頭に上れば、則ち歌調をなすは奇ならずとせず。而して其の聲予が耳に到るとき、乃ちまた靈性の哀叫となる。

國自慢の戒

列强よ、吾人をして、周章たゞしく自負することなからしめよ。吾人を讃美するなかれ。ア我友。

外國の新聞、就中英米兩國の新聞紙は、近時切りに其の紙上に於て、曾に吾人の心情をして舞躍せしむるのみならず、而もまた吾人の意氣をして軒昂ならしむべき文字を排列す。

神童は溺愛の誤るところとなる。詔諛は痛罵よりも禍なり。甘言は、少時其の犧牲者を高處に誘ひ到り、いよ〳〵高くして、而して其の失落をしていよ〳〵甚大ならしむ。

『日本的忍耐』、『日本的勇敢』、『日本的膽力』、『日本的豪氣』、『日本的先

見』等あらゆる附燒刃的讃辭の耳朶に響くは樂しからずとせず。吾人は此等形容辭の多くを受くるに値するものなるべく、若し然らずんば眞に禍なり。されど世界の讃辭は、當に受くべき程度に於て來るべし、其の度を過ぐるなかれ。

賞讃いと大なる時は、吾人の品位の最も能く人に知らるゝ時なり、これ當に吾人の多大なる缺點を省慮すべき時なり。

經に曰はく、『驕傲は滅亡に先だち、誇る心は蹉跌に先んず』と。茶道の師利休敎へて、

いつはりと思ひながらも譽めぬれば
譽めぬ誠にまさりぬるかな。

と曰へるは、これ畢竟一藝術者の言に過ぎずして、哲人の口より出づる類のものにあらず。

コロンビヤや、ブリタニヤや、彼等二者は、保姆とし、教師として、新日本の誕生以來、之を扶導し、慈母の眞情と愛念とを以て、之を保護したるが故に、今や其の成達したる寸尺を見て、歡喜禁ぜざるものあるは蓋し異しむに足らず。彼等の同情と厚意とを感受せよ、されど其の稱揚には戒心すべし。

地球表面に棲息する人種、その數多しと雖も、他人の批評に感じ易きもの、我が日本人の如きは稀なり。英人が看過すべき程の一顰一笑も、吾人の心には切り劈くが如くに徹す。甘言の日本人に於けるも亦有力にして、獨逸人の耳朶には無感覺なる程のものも、吾人をして意氣甚だ傲然たらしむ。ア、甘言諛辭に耳を仄つるものは禍なり。

『人の一生は、重荷を負ひて遠き路を行くが如し。』家康の此の語は、能く今の戰時に適す。吾人は既に爲すべきを成し、毫も非難せらるべきを見ず。されど既に獲たる勝利が、若し苟且偷安の因とならんか—放埒なる野心を誘起せんか—自から己を量るに大ならしめんか—吾人の自尊心を誇大せしめて、『日本人は他に卓絶す』との誤れる思想を抱くに至らしめんか—吾人は久しからずして、かの古來幾多の强大王國と、其の運命を共にするの日を見るべし。

吾人は英米に及ばざることなほ遠し。今や自足すべき時にあらず。吾人の責任は未來の歲月に繫がれり。今は自己の弱點を自覺すべき時なり。

吾人は約束の地なほ甚だ遠きにあるを知り、謙讓堅志を以て、勇往邁進せざるべからず。吾人の理想はアングロ、サクソン文明にもあらず、獨乙

文化にもあらずして、此等よりも尙高く且つ遠きに存す。されば吾人は一層、發奮努力せずんはあるべからず。吾人は前途の標的に到達せんとするに當り、彼等と竝駕するのみにあらずして、また能く之を凌駕せずんばあるべからず。

吾人の目的はなほ遼遠なり。今の如きは吾人を慰撫して自足休息せしめんとする、かの甘言諛辭を聞くことなかれ。

川ばた柳

何をくよ〳〵川ばた柳
水の流を見て暮らす

一夕予、鴨水の畔に散策するとき、六つばかりの幼兒が、此の俗歌を高唱するを聞く。此の歌予の耳に久し。處を異にし、時を異にしてしば〳〵

之を聞けり。醉客興に浮かれて之を歌ひ、行人月下に之を低唱し、美聲の少女が、其の幽鬱を慰せんがため、之を樂に奏するを聞けり。されど始めて小童の唇頭此の唱をなすを聞き、その甚だ不調和なるによりて、異しくも予の心を動かせり。彼たゞ一個の幼兒なり。歌題の河端柳は、形て於に知るも、いかで歌意を解すべき。小兒歌ふ、其の聲大いに樂し。彼を去ること遠くして、其の聲なほ聞え、歌の折句は、夕河風に漂ひて予に迫り、歌と歌者との間に存する矛盾の故に、感興一層深かりき。

童聲は予の悲想を破り、予を妄想より放てり。天は往々自足せるものの殆んど留意せざる、眇たる小兒を介して、語るに明々の眞理を以てすることあり。

天外の音づれ

嵐を載する黑雲時に絶えて、太陽の實在を示し、人生の闇雲も時に破れて、天上の約束を齎し來る。その靈魂に訪るゝは、電光の一閃するに似たり。吾人が其の義を曉りて、之を永遠に保留するを得ざる間に忽ち飛び去り、吾人をして一層不幸ならしむ。嗚呼悲しいかな、我等の輕卒にして、この稀來の天音に聽くことなきや。

收穫

收穫殆ど了り、帝國の各地よりして、豐年を報じ來る。二百五十萬町歩の耕地よりして、殆ど五千萬石を收穫せり。これ前古に比類なき產額なり。故に歡聲地に充てり。—たゞ此の戰無くんば、其の聲は更に大なるべし。

田家多くは歡聲を愼しみ、老者は旅順より歸來せる愛兒の屍灰を驚かさんことを恐れて、低聲豐年を祝し、寡婦、情人はこの豐けき實りを得るも蒼白なる群頭は微笑せず。孤兒は柴門に倚りて慈父の溫顏を刈入人の群中に覓むるも得ず。

汝、寒天の孤月輪。黃金色せる稻禾の間に、老者の勞役するを見、此の夜また滿洲霜寒き原頭に、勇士の屍を照らすものよ。—汝は、彼の屠戮の狀を見て、果して何の情かある。吁、予は汝が凄悲無情の光輝を憎忌する心殆ど禁じ維し。

傷ついて將に此の世を辭せんとする勇士あり。夜露の霑す所、秋月の照らすところ、再び翳める眼を開いて、皓々たる明月を仰ぐ。彼は月光を仰

いで、往時少年の平和を想起すべし。月兎の餅搗くも見え、玉盤に情人の姿をも認め、遠き凱歌の聲を、豐熟せる稻穗の沙々とも聞き、玎々たる馬蹄の響を、孜々として樂しむ鎌の音とも聞かん。彼は故山の爐邊を夢み、嬉しき幻影は、彼等の前に疾走せん。其の幻影には、收穫せる穀物あり、堆積せる藁あるべし。嘻々たる笑聲、田刈歌の調べは、微かに彼等が耳朶に落つべし。彼等は嬉娥を見て微笑するの時、其の驩情愛念を寄せ、其の赤心を委ぬ。

秋月の影は、稻刈る鎌の形を映するのみならず、ア、また是れ幽冥界の天使『死』の携ふる大鎌の形を現す、

我等いま愁思より轉ぜん。疲勞せる刈入人よ、籾磨の時の到らんまでは一日の休みを得よ。今は敬愛し奉る大威德の御門のあれまし〻日を祝ふべ

き幸の時なり。穀物の乾く間に、紅葉の秋よ、勞者の心を新たにせよ。門田は稻の黃に染み、山々は楓の紅に燃ゆ。天然は其の畵布に、色彩の讌樂を描き、赤貧も爰に來りて、歡興を恣にす。小兒は色々の衣に、楓の手を打ち、少女は花の絹を着て、森の錦と其の妍を競ふ。老者は流に俯し、逝水秋色を載せて、茫々たる運命に馳する水を視る。天然の美は此時に誇り、細溝も金絲紅條を流す。

玆に亦た偉大なる收獲の神は、我に回想の機を與へ、吾人の唇端自から聲あり。

もみぢ葉を風にまかせて見るよりも、
はかなきものは命なりけり。

の古歌を唱す。されど吾人の所思、徒らに憂愁に存するなかれ。胞きは固より楓葉の命なるも、人生は更に脆し。さりながら紅葉は其の美を傳ふ、

人生豈にまた之に似るべきにあらざるか。

神の造物は。悉く最大任務の日—『期既に滿つの時』—に臻るべし。其の任務は、往々深大なる悲哀、卽ち收獲の犧牲と時を同じくして來る。紅葉は華美の極みに及び、稻禾は黃金の色滿ちて、富と誇とを棄つべしと命ぜらる。ゲーテ敎へて、自我に死するは眞生命の始なりと。基督敎的言語思想の謂はゆる患難を經ることによりてのみ『人は、期既に滿つ』の時に達するを得べし。

豐けき實りは倉廩に充ち、燃え立つ紅葉の目を喜ばすに方りて、吾人はまた籾は臼に入れられ、紅葉は風に敢るべきを忘れず。人もまた—國も個人もまた然り—彼等に賦與せられたる寸尺の量目に達せんがためには、患難によりて苦煉せられざるべからず。吾人をして奮起せしめ、靈魂をして

烈火の試煉に由りて滅ぼさるゝことなからしめよ。收獲を感謝し、秋月を慶祝し、森の榮華を欣せよ。心剛に感謝に溢れ、諸人と共に享けたる業を勵みなん。大いなる刈入の主よ、何の日、何の時、たゞ欲するがまゝに來れ。其の來らん日は我等が爲に『期既に滿ち』たるの時なり。

波蘭語譯『武士道』序

論語は『有朋自遠方來、不亦樂乎』の語を以て始まる。其の義の眞なるは、支那聖人の古に於けるも、吾人の今日に於けるも、共に渝ることなく、中華に於けるも、日本また波蘭に於けるも共に異なることなし。謝すべきは交通の發達なり。今は既に昔にあらず、彼我國人は容易に精神的交驩をなし、たとひ言語の差異は、思想の自由交換と、友情の締結とを妨ぐることあるも、其の障壁は必ずしも超越し難きにあらず。諸國の間この障害あ

らんも、亦相互の仲介者たる言語を求むるに難からず。日本は英國また獨逸を通じて容易に波蘭と語り、相親近して情交の緣を結ぶを得べし。

豪快勇健なること波蘭人の如きが、予の說に耳を假すの恩典を與ふるは、予に於て望外の喜あり、恰も遠來の友を迎ふるの思あり。

予は曾て、ボレスラス・バトリー及びソビースキー等の故國に遊ぶの光榮を再びせり。而して各〻の時、而も第二回に於て、曩時予のコシアスコー及ばべニオスキー等愛國志士の史乘を讀み、また愛國の雄志彼等に劣らざりし、ニームセウイツチ及びミスケーウイツチ等の詩歌を唱して得たり感想の、今更深きを覺えたり。波蘭や、過去の記憶に忠實にして、祖先の地を熱愛し、心に大丈夫の德操を持し、至誠、愛國の情に富める國民を有すること、日本國民と相似ること多しといふべし。吾人の言語は、波蘭人見て以て未開の思をなすべきも、其の意義明かなるに隨ひて、諸君の語

彙中之と類似し、諸君の歷史これと對比すべきものあるを知るべし。『大名』『さむらひ』の語も、或は『カステリニ』及び『スタロスツ』と譯せずんば、能く波蘭人の耳朶に、之が固有の莊重なる意義を傳へざるべし。四十七義士譚の日本人に愛好せらるゝは、恰もバア同盟黨員の事歷の波蘭讀者に於けるが如きものあるを知らずんば、諸君に與ふるに、その小說的事蹟の興味を以てせざるべし。『大和』の名を聞くさへ、諸君にしてまた彼の懦夫をしてなほ起たしむべき『サルマチア』てふ自國の古名を想起せずんば、諸君の耳朶には平凡にして無意味なるべし。予は能く飜譯者の遭遇すべき此の種の困難の少からざるものあるを知る。

予は曩に米國に在ること數ケ月の間に於て、英文を以て『武士道』を述作したり。此の事既に予が主として對比の實例を英米の文學、習慣より取りたる所以を說明すべし。若し波蘭語を以て之を著述せしならんには、予

は先づ諸君の歴史、文學の研究を試みしなるべし。されど既に曰へるが如く、多少の皮相的支障を除かば、義氣、愛國、勇氣を以て世界に著名なる波蘭人は、予が貧弱なる文字の説ける日本民族の道德思想を以て、敢て奇異なりとせざるべし。予は切に望む、諸君能く我が邦を解し、諸君と精神を同じくし、また正義、偉大を求めて、神聖なる自田主義を擴張するに熱心にして、常に高義と清德とに向つて勇往する一民族の東邦に存在せるを熟知せんことを。

今や我が邦の歴史、否、世界の歴史の此の危機に際して大戰あり。全世界は目を峙てゝ、今の希臘が今の波斯と戰ふを見る。眇たる亞細亞の一民族が、正義と自由との爲に、歐洲文明を僭稱する絶大强國と戰ふの不思議を見る。天地の神は、孰れに對して微笑を洩し給ふべきか。神は只だ肉なる唇を以て其の名を唱へ、衷心、無辜の良民を虐げ、自由を抑壓して快と

するものを偏愛したまふべきか。將またエホバは眞に光と義との神にまし、人種の別を問ひたまはざるものなるか。此等は久しからずして、自から明かなるを得ん。日本民族の上下貴賤を通じて、彼等を衝動する武士道的精神とは、死すべき肉體に宿れる神の聖靈の發現なるや否や、吾人は刮目して之を見ん。將來の事實よ、請ふ、黄禍の警に、何の根據あるかを示せ。而して、波蘭人、若し能く寛大にして、日本民族の由つて立てる道德的、精神的の地歩を研究し、了解するあらんか、予は爲に感謝禁ぜざるべし。

予にして此の卑著ある所以は、歐洲人に對して、些か我が國民の心性を説明せんが爲なり。論旨は、正に彼のカシミア、ボロドヂンスキーが昂然として、『三百年の槲樹の嘯くが如し。風のまゝに搖らぐ、果なき葦の哭きの如きにあらず』と喝破せる壯烈なる一語を以て之を蔽ひ盡すことを得んか。

溫故知新

偉いにして尊きは、『現在』の享けたる嗣業なり。

曰はく有史以來、人類は著大の進歩をなさず、世界の舞臺には同一劇のみ再演せらると。然り多くの場合、人間社會の記錄は反複に苦しみ、人は彼れ此れ達する處あるも、また往々舊路に回りて數歩の背進をなす。されど過去なくば、吾人果して何の狀ぞ。吾人は燈臺の燦光、若しくは明滅する微光の照らす所、たとひ遲々たるも、漸次に天啓を見るあらずんば、安んか能く其の歩武の一進をだに得て知るべけんや。

吾人を促がすものは過去、吾人を導くものは死者。過去は悉く死せず、死者はみな逝かず。過去百代の廊廓は戰利品を列ねて、吾人の競進を刺戟し、死者は吾人に語り、吾人の衷心に語り、また吾人の爲に語る。凡ての

『新しき』に在りて『舊き』は生き、凡ての『舊き』は、『新しき』の約束を藏す。『過去』の傳ふる嗣業は、洵に偉いにして且つ貴し。

人は己の欲するがまゝに、往古の哲人を呼んで、其の智慧を語らしめ、また昔日の英雄を起して、其の勳業を語らしむるを得。予の今此の文を草するにあたりてすら、ソクラテス老は我が机邊に座せり。奇しきかなーソフロニスカスの子の放漫なる姿は、安樂椅子の上に座し、隆起せる眼は、此の文字を凝視し、其の禿頭をうなづかせて同意を表す。而も我が書齋の友は、ソクラテス老のみにあらず。プルタークの英雄、及び爾後の諸國の思想界、人類社會の先覺は言ふまでもなく、みな予の眼前に現じ來りて、如何せば能く彼等の傳燈を滅せざるべきかを敎へ、また誠意を以てせば、吾人をして彼等の短處と缺黑とに通曉するを得しむ。

吾人はまた凡ての時代、凡ての人類に於ける偉人の系統を嗣ぐ、彼等は

我等に遺すに、其の功業、其の智慧を以てし、其の遺産の大なるは得て量るべからず—而して之には相續税の課せらるゝこと無し。

そも〳〵此等の寶はみな何が爲にか存する。たゞ歴史の博物館を飾るが爲なるか。愚なる觀客をして呆觀せしめんがためなるか。此の無限の蓄富も、その用啻に斯の如きに過ぎずば、豈に悲しからずゝせんや。『過去』の讓れる嗣業は、諸人の有なり。されど求めずして享くる能はず。譬へば天國の如し、開放せられて、人の侵入するを許し、侵入者のみ、能く之を領すべし。人若し耳を傾けずんば、死者は默して語らず、その手自ら其の蔽蓋を除かずんば、過去は隱れて現れず。曰はく、『現在とは過去と未來との二つの永遠の聚合點なり』と。吾人は只だ自ら務むるにより、世々を經て永遠に蓄へられたる寶庫を開くを得べし。自ら努力せば、乃ち『舊き』に於て『新しき』を認めん。叩けよ、さらば智慧の門は開かるべし。求めよ、さ

らば神を見ることを得ん。

求めずば、過ぎなんとする年は、何等の教訓をも遺さじ。耳を假さずば、新年はまた何等の使命をも齎さじ。孔夫子曰はく『溫故而知新、可以爲師矣』と。

クスリマスは歴史を滿載す。人類記錄中の最大事蹟を代表し、世界の悲劇を代表し、神の喜劇を代表す。また是れ人間の靈的經驗の分水點を標榜す。吾人は熱心以て旅順の陷落を待てり。而してクリスマスは、惡魔王國の堅城の陷落したる記念日なることを忘る。基督の降誕—更に明かに云へばナザレの殉教者の出現は、吾人か熟考すべき一大史實なり。過去の遺せる最も貴き寶なり。然るに其の教訓と以心傳心との意義とを省察することなく、たゞ之を歴史の飾棚に埋藏するは、卽ち寶の用を謬るものなり。盲せるかな、クリスマスに於て、たゞ快樂逸遊の時を得るものや。聾せるか

な、天使の讃美を聞くことなき人や。世々久しく語り繼ぎ言ひづきし彼の歌より、新しき教訓を搜り、此のいと古き昔語より、新氣力と、新精神とを汲みて、以て新年を迎ふる人は眞に賢者なり。

（三十七年十二月）

過去と現在

時去る。過去の恩惠を忘るゝものは咎あり。一時の快樂に耽りて、過去の苦き涙を去るものは過あり。彼を責め、此を誹る、予を以て酷なりとする乎。人の記憶は短し。過眼の一瞬は、其の刻々の辛勞、義務、苦痛、悲哀、快樂はた悅喜を以て吾人の心を魅す。無限に短き現在は、永遠の過去を呑了し、過去の幻影、記憶は、たゞ現在を養ふの餌たり、舊屋傾き、柱、床の唐木みな朽ちて、唯だ現在を暖むるの薪となり了る。

小兒

喃々たる幼兒、彼は吾人を支配す。吾人の心情は、彼が可愛ゆき意志に甘從し、吾人の意志は彼の氣分によりて左右せらる。勇者は彼の爲に戰ひ且つ辛勞し、婦人は彼の眠り安からぬ姿に、幾夜寢ねず。呱々の乳兒にして聯隊長たるもの、豈に獨り露國皇儲のみならんや。

柔和にして力弱き此等の者の天國を繼ぐは、道德上の律法なり。可弱き嬰兒は、正統の儲貳なり、來るべき帝國の皇太子なり。『神の國に在るものは、斯くの如き者なり』と。而して地上の王國もまた彼等の有なり。

瞞着邪曲の最大勢力を有すとも見ゆる此の世にありて、人間が永へに僞辯に蠱惑せられざるは、疑ふべきが如くにして、而も否むべからざる事實なり。人間界、自然界に於て、最善は遂に醜惡、虛僞を制し、弱者の善德

は、巨人も侮るべからず、逆らふべからざる勢力を有す。ダビデがゴライアスを斃したる一事は、即ち宇宙永遠の律法を實現せるものなり。

小兒の偉力の由つて生ずるところは、其の純乎たる善德にあり、衷心の高潔なるにあり、極めて誠實なるにあり。極めて眞率なるが故に、吾人は彼等の爲に道を開いて、其の欲するところに往くに任す。

彼等の眼光は透徹す—誰か其の哀訴を拒むべけんや。彼等の方言は天籟なり—誰か其の雄辯の魔力を感ぜざらんや。天は彼等に許すに權能を以てす—誰か彼等が無言の要求に抗すべけんや。彼等は此の世の治者なり、此の世の責任義務を未來に繼承すべき者なり。匍ふも、歩むも心のまゝ、誰かこれを制し得ん。彼等は禮法を無みし、チエスターフイルドも小笠原も嚴格なる規律を以て彼等を束縛する能はず。彼等は人間社會の區々はる律法以上に立ちて、其の律法の一點一角をも破らず、而して更に高大なる律

法—即ち愛の律法に從ふ。幼者の至大なる魔力、威力とは實に是に存す。汝若し大地を行きて、何の處にか永遠の勝利—即ち一人の心が他者に服從し、勇士が弱者に歸依し、また武夫が一婦の爲に死を辭せざるを見んか、汝は贅尨なる腕力、體力の下に、純なる愛の力が奇跡を行ふを知らん。

稚兒なるクリストに對する不易のインテレストは、丈夫なるキリストの教訓の故に由るにもあらず、晩年の尊き苦難の故にも由らずして、神の小羊が我等の愛念を喚起し、吾人の衷心これに應ずるものあるが故なり。神學、哲學は、基督の說きしこと、說かざりしことに苦勞するも可し、されど宗教は、嬰兒なる救主を崇拜するを以て足れりとせん。

予は空言を語り、跚歩する幼兒に於て、天に在ます御姿の影を認む—彼は天上の美に輝きて、新たに造られたるものなり—高きよりして、絶えず新たなる教訓を傳ふる御使なり。然り、實に然り、然らずんば予何ぞ幼者

の言葉に暗涙を催し、その嬉々たる容貌によりて、我が心を動かさるべけんや。

天の幻象

天の幻象、時に予の前に閃過す。その現るゝや速かにして、消ゆるも亦速かに、去來恰も電光の如し。ア、冀はくは、其の久しく止まりて、永へに予が心に宿らんことを。されど、嗚呼何すれぞ、予は寸尺を以て天國の道を測るの難きよりもなほ難き、彼の分秒を以て大靈の御業を量ることを敢てせんとしたるか。

神にありては千年は一日の如く、一日は千年の如し。されば一閃は恒光の如く、恒光も一閃の如し。

不機嫌

予の常に記して戒とするは、何者をも憎まず、また何者をも賤しめざることなり。是れ道理を輕んせざる爲なり。何物たりとも、道理を基とせざるはなし。世に在りと在るもの、最醜と最美とを問はず、皆其の存在の理由なきにはあらず。されどたゞ爰に外、無害にして、內、有害に、予の心甚だ賤しんずるものあり。不機嫌なることは、卽ち其の一なり。

たとひ人其の不興にして澁面を作るに、何の理由あるも、予は理由其のものを賤しむ。

快濶なるは、各人の義務にして、また其の權利なり。不機嫌なる面付をなして、隣保、行人の心に冷水を浴せつゝ、人生といへる狹き田舍町を步むは罪惡なり。欣々たる容貌と、愉快なる微笑とをもて、其の友を迎へざ

るものは、社會より追放せらるべきなり。この輩の恐るべきは恰も疫癘の如し。一人不興の顏色をなさば、其の毒、周圍の空氣に感染し、其の地を、して小兒と天使との居たるに適せさらしむ。

月影多々

船、打狗の港外に碇泊して、潮時を待てり。甲板人影なし。予獨り欄干に凭りて月を見る。今夜、月ことに明かに、海、浪を揚げず。

微風、靜けき水面に動き、死の時を呼び醒まして、漣波を躍らしむ。

二つなき月を川風いかにして、
波のうね〳〵まきちらすらん。

予の思想は光體を超越す。讃美そゞろに、我が唇頭に來り、予は跪いて曰ふ、『ア、汝名づけかたき偉大者よ、汝獨り生き、汝獨り照らす。汝なくば世は死せん。汝の光なくば、宇宙は暗し。蠕蟲の脆き一生も、日輪の赫耀たる運行も、かゞやく海も、果なき我が息も、皆共に汝が永遠の生命の反照なり』と。

予再び頭を扛げ、月を見て、我に似たる靈體を觀、呼びて我が姉妹よといふ。

（明治三十年三月打狗）

思想の漂搖

何ぞ、我が思想の、小頭腦より閃光の如く射出して、羅針盤も記さざる方向に馳せ、地理書も語らざる方角に飛び去るや。

我が思想は、我が力及ばす。落着かざるまゝに精神世界の端に逍遙し、予、今其の居處を知らず。時として一握の家苞—かの不可思議界に滿ちたるべき薫香のほのめき—を携へ來ること無きにあらざるも、多くは徒勞し、

たゞ倦怠を得て歸る。されど此の倦怠は一瞬時のみ。山巔に攀ぢ溫泉に浴するが如く、其の始めは之を感ずべし。されば我が靈魂の杳遠に馳する時も、たゞに疲勞を訴へ、僅に天花の微香を嗅ぐのみならず、何時かは又いと貴き報を受くべき望なきにあらず。

遺族

轉覆せんとする帝國あり、興隆せんとする帝國あり。絶大なる筋書のドラマは世界史上に演ぜらる。勇士は寶血を濺いで、勝利と喜悅とを得、氣息將に絶せんとして、なほ『勝利』と叫ぶ。吾人は彼等を呼んで英雄とし、彼等を記念するがために碑文を刻みて、而して彼等が義勇の價を忘る。戰場に馳せ、陣伍に加はることなき吾人は、軍人の家庭に於ても隱れたる戰あり、無名の勝利あることを覺るべきなり。吾人の耳邊には、戰場の叫喚

にも優りて悲しき呻きは聞ゆ。惱める家には、戎衣の下に騷立つ胸よりもなほ更に剛毅なる心胸あり。

聞かずや。予は悲哀に打沈める母の長大息を聞く。予は思へらく、日中の勞役は、たとひ口を糊するに足らずとも、『疲れたる身體を回復すべき、彼の心地よきもの』を與ふるに吝ならじと。されど過てり、其の睡眠は戸外の風雨、はた茅屋に洩るゝ雨滴の妨ぐる所となる。夜は寒し、されど彼女が愛兒を蔽ふべき衣は薄し。兒は飢ゑ凍え、母に添ひて、其の胸をさぐる。母は之を慰撫して、眠に就かしむるや、靜かに蒲團を忍び出で、燈火を揭げて、近く戰場より送り來きる亡夫が唯一の記念を、錦の囊より取り出だせり。

行燈は暗し、更に暗きは寡婦の眼なり。面は痩せたり、されど筆の運びは健やかに、斯くぞ認む。

なきつまのかたみの劍とりいでて、
獨り泣く夜に村雨のふる。

『お母さん！ お母さん！』

『靜かになさい。ドウかしたの。ねんねおしよ。』

『抱いて頂戴。お父さんのやうな人が、眞青な顏をして、お母さん、血ま
みれになつて、私を起して話をしたよ。』

『何と仰つたね？』

『私の名を呼んでね、お前に一口の刀を遺したぞ、お母さんが持てゐる。
だがそれよりか良い劍を、お母さんが自身でお前に下さるぞッて。これ
は夢なんですね、お母さん。』

『イヽエ夢ではありません。コレ爰にお父さんがお預けになつた刀があり
ます。御出征の朝、私を書齋へお呼びになつて、私の手をお取りになり

—そんなことは、これまで、ツイぞ無いことで—仰るには、「私は命あつ
て、二度と家の閾は越さない覺悟だ。陛下の御爲、國の爲に、死にゝ往
くのである。劍や銃で戰ふのだ。可愛い小供は御前に預ける。彼の兒が
天子樣にも、また自分の良心にも忠義なものとなるやうに、日本にも、
また神の國にも信實な者になるやうに教育してくれ。その上信仰の劍で
戰ふやうに」と。また仰つたには、お前が成人する頃には、露國人より
も强くて多勢の敵が、御國に攻めて來るぞと、其の事をお前に言ひ聞か
せよとのことでありました。解かりましたか？』

『お母さん、能くは解りません。お母さんから下さると、お父さんが仰つ
た刀は何處にあるの？』

『それは靈魂の劍のことなのです。此の刀のやうに目には見え無いけれど
錆ることも、折れる事もありません。それは信仰の劍といふものです。』

『では私がいつか西洋の畫で見た、お母さんの心臓を貫いてゐる、あの劍？』

燈油將に盡きんとし、火光將に滅せんとす。母も、小兒も、劍も、みな朦朧たり。而して暗中、斯の母の頭邊に燦然たる後光を見る。予の目、此の光を凝視するや、予は耳を欹てゝ、轉覆する帝國の碎音、興隆する帝國の喚呼を聞くことを忘れたり。

（三十八年四月脳化）

感謝の理由

予が心は、日には某の時、年には某の季と定めて、其の時に於てのみ天に祈るにあらず。されど小兒の眼の輝くにも、淑かなる少女の恥ぢらふにも、老者の溫厚なるにも、丈夫の勇敢なるにも、また智慧より出づる貴き言葉にも、みな之に感謝を捧ぐ。赫々たる日光、哀々たる月影も、また予

をして感恩の念を催さしめ、道路の人の莞爾として微笑するにも、また輕快に點頭するにも、予は脫帽して、敬虔なる祈念を捧げ、益友の語を聞いては神前に跪く。あらゆる自然の物象、あらゆる同情の行爲は、みな感謝の機會となる。

善とは神の發現なり。善事は皆予のために神格を證し、神明の實在を證す。然るに吾人は到處に存し、また周圍の萬物に存する善を觀過するものなり。

曰はく『有り難し』と。善きものゝ有り難きには有らず。物のあらぬこと難く、啻にあらぬ事の難きのみならず、また善くあらぬことも難し。人に於て最も難きは善が萬物の靈魂なることを認め、善魂にありて神靈の宿るを認むることなり。

戰後の事業

號外賣の鈴聲、天空に轟く萬歲の聲、欣舞して街路をねり行く提灯行列、戸毎に勇ましく翻る國旗—皆いふまでも無く、吾人がまた戰に勝ち得たるを報ずるものなり。されど言語は、吾人が心奥の情感を盡す能はず。種々の聲、街頭に翻る國旗は、以て悅喜、否、寧ろ感謝の念を悉く表現するに足らず。殷々たる萬歲の聲も、燦然たる提灯も、國民の至情を發露せしむるに足らず。

そゞろに浮き立つ喜をもて、吾人の胸は高まり、心は歡び極まつて躍れども、心胸その奥深きところには、更に靜かなる悅あり、安らかなる幸あり。ア、后天に感謝す、吾人をして勝利より勝利に進ましむるものは、武器の力によるにもあらず、腕力に依るにもあらず、人智の計に由るにあらず

して、洵に汝が大御力の業なり。

ナポレオンは峻險烈苦の艱難を冒して、アルプスを蹴破し、一險既に過ぎて、一峻また疲勞せる三軍の前に横たはりしとき、彼は "Alps beyond Alps" (アルプスを過ぎて、またアルプス在り) との記憶すべき名言を叫びたり。宜なり、人の業には終期なく、國家も亦然り。河を渉れば、森に來り、林を分くれば、山に入る。我が一勝は、兵士をして豪傑たらしめず。吾人は千峻萬險を越えずんばあるべからず。名將は捷ちて兜の緒を締む。思へ露國の力源は遼陽に盡きず、對馬海峽に竭きず。彼が戰爭を續くる限り、吾人が喜ぶも、喜ばざるも、ア、吾人は彼と干戈を交へざるべからず。よしまた露國たるもの、適當なる條件の下に戰を戢めんことを請ふとも—此の戰爭其の終を告ぐべしとするも—其の後に隨ふべき戰爭の幾許大なるかは、吾人未だ之を測り知るを得ず。戰後の吾人に來るべき要求に想到せば、

豈に畏れずしてあるべけんや。今のアルプスを越ゆるも、吾人の前程には、更に高峻なるアルプスの險路の殆ど攀ぢ難きものあり。勇め、青年諸君。諸君に要するものは、我が同胞が滿洲の霜寒き原野、日本海の狂浪怒濤の間に奮ひたると等しき勇氣なり。陸海軍人の顯著なる勳功を羨望する莫れ。諸君—机邊靜かに書を繙く諸君は、久しからずして、更に艱苦劇甚なる戰を闘はんが爲に召し出さるべし。

戰後の事業は、我が民族の知識と勤勞とを要求すること多大なるべし。戰闘のために借入れたる公債を償還すること、果して如何にせば可ならんか。寡孤となれる幾萬の遺族に對するは、果して如何にすべきか。更に新敵と戰はんが爲に、果して何等の準備を講ずべきか。今の陸海軍は五十萬多くとも百萬の人を統率するに過きずと雖も、戰後に來るべき平和の戰爭は、五千萬の老若男女擧りて之に參加せざるべからず。陸海軍はたゞ男子、

而も同一種類の男子を指揮すと雖も、戰後の主將は、あらゆる種類階級の人間、而も統率し難き人間を指揮せざるべからず。

戰後に吾人の盡すべき偉大なる事業の存在することを思へば、卽ち萬歲の聲も遠く彼方に消え、赫々たる炬火も其の光を滅す。

此の擾々たる時、獨り密室に退きて學ぶにあたり、吾人は以下の數點に留心せずんばあるべからず。

第一—遺族に與ふべき保護これなり。其の救護の爲に金員を寄附するのみを以て足れりとせず。詩人曰へらく、『惠者が其の心を與へざる施與は無益なり』と。乞食に施すにも、なほ守るべき禮儀あり。兵士の遺族に盡すべき救護は、單に慈善たるのみにあらずして、要するに死者に對して感謝と犧牲とを捧ぐることたるべし。政府は年金と恩典とを分配するがために爲すべき大事業あり。國民もまた別に有力なる機關を有せずば、彼等遺族

の爲に當然の應報をなし難し。

第二—韓國處分の問題は、吾人の注意を惹かずんばあらず。政治的本能を缺き、經濟的常識に乏しく、知識的野心無き、彼の薄弱なる女性的國民は、黄色日本人の重荷となれり。吾人は死せる此の一國を復活せしめんが爲に、辛苦經營する所なくんばあるべからず。政治家獨り之を能くせず。教師、農業家、說教家、工業家、外交家は、三軍の將帥よりも、更に驚異すべき功業を奏することを得べし。

第三—借金は利子を附して償却せられざるべからず。加ふるに多種の新事業の爲に資金を要す。外債が國家の運命を危からしむること、侵寇軍よりも恐るべきものあり。吾人の債務は吾人の土地より產出する物—地中の富にもあれ、製造品にもあれ、此等なくんば國債を償却する能はざることは、更に言を俟たず。物質的財源の發達は、國家の死活問題なり。新鑛山

發見せられざるべからず。現在の鑛山をして、一層有利ならしめずんばあるべからず。銅、鐵、鋼鐵の製練所を設けて、內地の需要を充さゞるべからず。絹、木綿、毛布を織るべき製造所を設立して、此等の物品を海外に輸出せざるべからず。地は更に深く耕し、未墾の土は拓かれざるべからず。禿山に値うるに木を以てし、草原を牧場となして、倍多の家畜を飼はざるべからず。

第四—實業の進歩と共に、世界他邦との貿易もまた增大せしめざるべからず。吾人は多く賣るべきものなると共に、また海外より一層多く購はざるべからず。商業の發達と共に、海運業を增進せしめざるべからず。在來の船舶に優りて、巨大快速且つ良好なる船舶を一層多く所有せざるべからず。港灣をして船を入るゝに更に便利なるものたらしめざるべからず。沿岸河流の航通進歩すると共に、陸上の運輸もまた之れと競爭せざるべから

ず。吾人は米國の汽車速力率の二分の一乃至三分の一を以て旅行すべきものにあらず。

第五—外邦との政治的關係は、各〻の方面に於て一層密接となるべし。我を輕侮するを常としたる露國は、今や其の非を覺りたり。由來我が邦を重んずることなかりし獨佛は、我を以て常に一笑柄としたりし如きを止むべし。我を兒邦として保護したる英米は、自今我を遇するに成人の國を以てせん。我に對するに猜疑の念を以てし、亞細亞の舊慣に背きたりしとして、我を非難したる亞細亞全洲は、これより我の嚮導に隨從せん。

第六—外交上、商工業上、歐米との關係の密接なるを加ふると共に、吾人は泰西の言語、特に世界通商上、最も普遍の中保者たる英語に一層練熟するの要あり。吾人は我が國語が多少朝鮮に普及するを見て、之を誇ると雖も、これを以て我が國語が世界に共通せられべきものゝ如くに思ひて、自

ら欺くべきにあらず。虛誇、自慢に盲せられて、英語の實利的價値(道德的價値はいふまでもなく)を看過することなかれ。蓋し此の國語を使用する人民は、我が製造品の最良顧客たるべし。

第七—泰西との交通の進歩するに連れて、思想の交換もまた自由を加へざるべからす。吾人は更に能く泰西を知り、また更に能く知られざるべからず。東西の間、今なほ悲しむべき誤解は存す。兩者の間には厚き障壁の遮るあり。たゞ互に偏見を去りて、他を研究することによつてのみ、此の障壁を打破するを得ん。吾人の英語を知ることは、店頭に商務を辨ずるに可なるのみなるを以て足れりとせず。吾人は沙翁・ミルトン・スコット・デイツケンス・ダーウイン及びカーライルを讀んで、之を味ひ之を樂しむを得すんばあるべからず。而してまた讀書力あるのみを以て足れりとせず、泰西人をして、吾人の思想を明解せしめんが爲に、能く英文を草すること

を學ばざるべからず。吾人は自ら自國の說明者たらざるべからず。吾人の感情を傳へんが爲に、到處に小泉八雲氏を期待すべからず、一人の岡倉氏、悉く我を他に說明するの勞に任ずる能はず。

蓋し近き將來に於て吾人に來るべき要求は、之を枚擧するに遑あらざるべし。されど以上數點を觀察せば、其の他は、之を推知するに難からず。史上曾て戰爭によりて、眞に强大を致しし國家あらず。戰によりて得たる力は、決して持久せず。一國恒久の幸福は、獨り平和によりて生ず。されど平和も亦た戰爭と同じく、其の中おのづから禍根を藏す。平和は絕對的幸福にあらずして、單に社會上。道德上の富榮狀態なり。高大なる目的に達せんが爲には努力せざるべからず、而して之を爲すの力は戰に由りて生ず。眞に高尙なる生涯は活動なくして來らず、此の活動も亦た戰に由りて學ぶ。されど直接の勝利以外、何等の純潔にして、宏大なる識見もあること

と無くして、たゞ絕えず戰ふを以て目的とするは陋なり。かゝる目的に奉ずるの生涯は高尙ならず。戰に勝つは、たゞ經濟的繁榮の端緖たるのみ。これを手段として、更に鞏固に國民を結束すべく、而して此の結束もまた是れ人類が最早戰場に於ても、市場に於ても、同胞を敵視せざる、彼の黃金時代の實現に到達すべき階段たるに過ぎず。

（明治三十八年六月）

心的不消化

予の曩に巴里に在りて佛語を學びし時、予の敎師は常に己が數種の語學に通ぜるを誇りき。予問ふに、彼が西班牙語に熟達するに至れる所以を以てすれば、彼は答へて、之を學ぶが爲に、數千フランを拂ひたりといひ、予また彼に幾許の伊太利語を知れるかと問へば、彼は曰く、伊太利語を學ぶが爲に、ゼノアに滯在すること五ケ月、千八百フランを費やしたりと。

是より先き、予は未だ曾て、法(フラン)または弗(ドル)を以て語學の技倆を測るものあるを聞かざりしが、予はこの後、讀書の冊數、または山鳥の尾の長々しき書目の記憶を以て、教育の効果を量るの標準とする者あるを見たり。

書籍の紙數または冊數によりて、人の知識と、智慧とを打算せんとするは甚だ嗤ふべし。凡そ書を解すると、之を讀むとの間に於けるよりも、之に通ずると、之を解するとの間には、一層大いなる懸隔あり。また書物を消化すると、知識に通ずるとの間には、更に大いなる相違あり。吾人をして強健ならしむるものは、吾人が食する物の量に由るにあらずして、吾人が消化するもの〻量に由る。吾人をして聰明ならしむるものは、吾人の讀みたるもの〻量に由るにあらずして、吾人の心念、人格に同化し得たるもの〻質に由る。

今日の謂はゆる教育なるものは、讀書を偏重して、兒童は教師自らも咀

嚼する能はざる底のものを鵜呑みにせざるべからず。彼等の理會力に過ぎたる尨大なる書冊は、教科書として賦課せらる。心的不消化は現代の疾患なり。此の疾患はまた不幸にも、危險なる傳染性を帶びて、老若、男女、貴賤を侵し、特に學生、教師の間に於て其の勢最も猖獗なり。政府も社會も、一般に此の病毒傳播の媒介者なるもの〻如し。

蓄音器の如くに、單に音調を擦り出すことを本旨とする學校組織は甚だ憐むべし。常套を以て常識に代ふる教育法は無用の長物なり。靈魂に存する力を引出すに反し、學理、文藝、技術を以て青年の心を充塡する教育說は根本的に誤謬なり。

謙抑

今や國人擧りて、日本は勢威名譽ともに、將に向上せんとするものなり

との信仰を有す。此の自覺は大突に漂へりとやいはん。されど我等安んか誇らんや。却つて吾人の時代を寵せる千載一遇の恩惠を畏みて感謝し、謹みて頭を俯す。向上若し吾人の運命ならんには、謙遜、感謝の念を以て之に臻らん。思へ、心驕りて天惠を濫にしたるが爲に、滅亡を招きたる邦家、古來頗る多きにあらずや。

個人の德質の國家の强大を增すは、なほ國家の德業が、個人の德質を顯著ならしむるが如し。一國自ら誇らば則ち危く、其の立國の約束を覆へさん。滿は損を招き、驕が恥を來たらして、始めて謙抑の德を學びたる國家は、其の例に乏しからず。吾人も亦其の數に洩れず。たゞ冀くは吾人が必ずや恥の盃を傾け盡すなからんことを。此の願望のため、吾人は務めて恥の眞因たる、不當の驕傲に遠ざからずんばあるべからず。

現在の戰爭は我が國を高むるものなりと考ふるなかれ。戰は兩刃の劍の

如し、敵を僵すと共に、また已を傷ふ。

もし此の戰爭は、我が國の地位をして列强間に高からしむるものなりとせば、予は試みに問はん。吾人がその高地位を保つこと、果して幾許年なるべきかと。吾人が所信の通り露國を膺つも一之を以て我が威力權勢また訓練の卓越を證すべからず。唯だ露國が自ら威力權勢また訓練を誇りしことの空言に過ぎざりしを暴露するのみ。露國は今や自負の價を拂ひつつあり。敵の劣弱を以て、切りに我の優越を謳歌するなかれ。吾人の未だ劍を交へざるも、露國より遙かに雄大なる强國あり。而も露國とて何の時までか微弱なるべき。彼には有爲の民族あり、無量の富を產出すべき國土あり。唯だ其の患とする所は、無能濟度しがたき政府なり。露國の病根は治者が自尊自負の極、之に醉うて軟化せるにあり。戰爭は彼等に敎ふるに謙抑を以てすべし。露國が一旦麻を着、灰を被りて悔悛せんか、(彼は何時

にても悔悛し、改善するを得べし）其の國民の美質は玆に發揮し、眞に雄大なる將來ありて、其の國家を俟つべし。

之に反して、吾人若し自讃し、勢力强大を信じて自欺し、僅かに滿洲の高粱畑に出沒する瀕死の小賊を捕へ得たるの故を以て、吾人に擬するに巨人の勇を以てする、彼の甘言美辭に乘せられて之に穿らんか、やがて悔恨の日來り、心膽ために寒かるべし。

吾人は自家の發達、成長を知らざるにあらず。血管に漲り溢るゝ熱血あり。筋力滿ちて躍る、足は靜止せじ。たゞ力の誇に至りて、自ら倒るゝことなかれかし。

（三十八年八月）

夏天の飛行

異しくて夢の如き思想は、夏日白晝、予を襲ひ、予を驅りて星界の彼方無限の大空に逍遙せしめ、予暫く無窮と合す。然るに塵土は、小さやかなる煩勞と責任とを以て、再び予を現在に召還す。

假初にも、一時高天に飛行せしことは、靈魂を新たにして、能く現生の煩勞と責任とに耐へしむ。その煩瑣は予を落膽せしめず、その小限界は上界の天象を反映す。野に咲けるいと卑しき花も、前氷河時代の植物を知り、また宇宙の太陽系を知るの便りとなる。

一粒の砂に世界を觀じ、　野の花に天界を知るべく、
汝の掌に無限を藏せ、　一瞬に永刼を容れよ。

ブレーク

母の愛

母の心―誰か其の深さを知らん。科學も之を量る能はず、哲學も之を測る能はず。母の愛は神愛に酷似し、人間愛情の至高の發現なり。動物的本

能を具へて、人情の最自然なり。母の心の鍛へる鎖は、天地間の最高者より、最劣等者に懸け亙され、其の妙巧なる鏈環が、一人の心を他人に繋ぐ力は、鐵鎖また法鎖よりも強し。吾人は之れ以上、有力にして純潔なる愛を想像するを得ず。人は未生の時より、みな之に浴し、また之より離れて、遠く放浪すとも、生けるかぎり、之を忘るゝ能はず。人誰か心を殺して能く生くるを得んや。然り、心は『母』の神殿なり。墮落沈淪の極も、心の母を奪ひ去る能はず。

母の愛なき世界を想ひ見よ。ダンテすら、より恐ろしき地獄に想到せざりき。ビアトリスの在るところは、彼の樂園たりしならん。されど母なくば、樂園變じて、必ずや地獄とならん。『如何に佗しとも、ホームに優るところなし』と歌ふべくば、また『如何に榮ゆとも、母なくてホームあらず』とも歌ふべし。母いまさずば、その影像も亦母ありとの想像も、以て母の

亡きを償ふべし。惑はし嘲けり、此の念を賤しめんとすとも、我が心の母の實在を除く能はず。

ア、善良なる基督教の友よ。予が母の命日に會するごとに、其の御姿を床の間に安置し、花一枝を手向けて、追慕感恩の情を致すとも、爲に偶像禮拜として予を罪するなかれ。母の寫眞に向ふとき、覺えず頭を垂れて、恭敬尊拜すとも、爲に惡むべき異教徒として予を責むる勿れ。母の靈は、予に實在にして、なほ肉に在るがごとし。予樂しむか、母も共なりと信じて喜び、予悲しむか、其の苦痛は母がやさしき同情の慰によりて癒さる。誘惑來るとき、母の御顏は予に輝きて、予を救ひしことも幾度ぞ。英氣衰ふるとき、母の御姿が予の心を勵まして、務め働かしめしことも、また幾度ぞ。

予は少くとも一年一回、母のたまひし凡ての御文の一卷を開き、清き愛

の盡きざる泉を汲み得て、精神の渴を醫せられざるはなし。是れ予に於て不老の神泉なり、予をして少年の日に還らしむ。母は曰ふ、良兒たれ、善人たれ、人を煩はすなかれ。風を引くな、精出して勉めよ、されど勉め過ごすなかれ。『善良にして偉大なる人物となるは、父母に至大の名譽を歸することなり。汝が善良偉大ならんには、人は汝を以て父の子たるに恥ぢずといひ、われ父と汝とを誇らん。されど汝もし不良愚昧ならんか、人は汝を以て母に似たりとし、汝の不名譽は、卽ちわが耻辱たるべし』と。

母の慈語を思ふとき、母は予を高めて、譴めざるにより、自己の缺點を知ること、いよ〳〵明かなり。御文の卷の開かるゝにつれ、母が最後に此の世を歩みたまひしこのかた過ぎし二十五年の春秋は、活ける現在に沒して、予は母の和かなる御手に觸れ、やさしき御聲を聞き、心ありげの床に母の跫音を聞く。記憶の神通力は、現在も、過去の二十五年をも一掃し去りて、予が一介の少年たり、母なほ若盛りなりし日に予を生かしむ。愛は時間と空間とを知らず。愛は老を幼とし、死を顧みず。母の愛は、この不思議なる力あり。この力は往々超人的比例と特質とを有して、自然の法則を超越するものゝ如し。ユーゴーが之を以て神が分け與へ、且つ殖したまふ奇蹟のパンに比したるもまた宜なり。

世の與ふる平和

平和つひに來る—されど、ア、斯の如き平和よ。神より出でて人智の解しがたき平和あり。世の與ふるに過ぎざる平和あり。平和は惠福なり。されど目的は手段を擇ばずと敎ふるは陋なり。平和は甚だ高尙なり、之に惠福ありと雖も、之に達するが爲に擇びたる手段にして陋劣ならば、何者を以てするも、決して其の過を償ふ能はず。正義を價として購ひたる平和

は、果して眞に永久なるを得べきか。平和が苟且偷安の策たることあるべし。しかも痴人の立てたる足場たるもあり、惡魔の棲むべき宮殿たるもあり。予しば〳〵見る、家屋が、外、安泰を示すが如くにして、內、白蟻の土臺を食みつゝあることを。また見る、名匠の築きし大厦高樓も、無情の手によりて頽壞せらるゝことを。されど零碎せる墟趾に平和あり。大工も左官も最早手を下すこと無き、かの糞土、朽木を支配するものは、平和にあらずして何ぞや。世の與ふる平和は、實に斯の如き類なり。

預言者エレミヤの日に於けるが如くに、此の國の大いなる者どもは、『淺く我が民の女の傷を醫し、安からざるに安し安し』と曰はん。

救世主が、吾人の心に齎し來る平和は、大いに之と異なり。多くの基督教國の間を結ぶ平和も、神が人と約したまふ平和の契の美しく且つ强きに比ぶべくもあらず。

要するに、吾人は平和に國家的なるものあり、個人的なるものあり、政治的なるものあり、また道德的なるものあることを曉らざるべからず。若し道德的平和一たび破れんか、一幾暴動、その以上に劇烈なる騷亂は必ず や伴起し、政權も能く之を鎭撫する能はじ。國家的平和は、家庭にも、個人にも、平安を保障するによりて、始めて永久なるを得ん。

屈辱を以て購ひたる平和を取りて、不滿なる國民の喉に押し入るゝ政治家は、自ら之が償をなすの決心なかるべからず。同時に國家的平和を以て、幸福進步の唯一保證せんとするものよ、何ぞ失望の運命の臨み來れるを曉らざる。外形的、一時的の平和を計るが爲に、內なる平和を犧牲とするものは、禍必ずや其の身に及ばん。

平和が惠福を來らさずして、却つて腐敗を來らす國家は、大いに悲むべし。かゝる國家の前途には、現在の平和よりも、更に大いなる問題の横た

はれるあり。

秋天碧を堪へて高く、月澄みて清く、蟲は草葉の露にすだく。吾人は來るべき冬の嵐に備へざるべからず。

夏期の注意

今は、夏の眞盛なり。他は草木の榮に蔽はれ、天はいと暑すしく、またいと華やかなる羽族に滿ち、而して自然に於ける人間の地位は、無殘に衰へたり。太陽さへ、彼の精力を枯らさんと逼る。一年中、人間が脆くも天然に屈する、此の時の如く甚だしきはあらず。池水は紅蓮、白蓮に燃え、風其の香に薫ず。色も香もみな懶き風に退屈の夢を運び、日ねもす『常に午後』の氣分あり。人は蓮の實を食らひ、熱帶的懶惰に流れて、居眠をなし、畫寐をなし、夢を見る。吾人の靈魂は、或種の動物の冬に於ける如く、

夏に於て蟄伏す。たゞ眠れる靈魂をして、永遠の眠に就かしめざらんことを心せよ。

和戰の用

人生は塞翁が馬なり、時に祝福を齎し、時に呪詛を齎す。喜悲は更替して生涯を成す。陰欝と快活との二つの絲、否、この二色の無數の絲筋は巧みに糾はれ、一を見る時は、他は見えず。彼れ此れおの〳〵の眞價を量るは眞の賢者なり。巧利主義が、此等を解きほごして、秤の一皿に苦痛の陰氣なる色を置き、他の皿に華麗なる快樂の色を置きて、兩者を平均せんとするも最も至極なり。

戰爭もまた斯の如し。戰爭は祝福か、呪詛か。戰爭は苛責たり、呪詛たるは、無論の義なりといふべければ、斯やうの質問の出づるは、爲に敬虔

の人を驚かし、懦夫を氣死せしめん。戰爭は疑もなき害毒なり。されどまた多くの教訓を結ぶ害毒なり。問者屢〻曰はく、艱難は祝福なるか、呪詛なるかと。艱難その者は、諦め良き人なりとて、之をば神の贈物として讃美するはあらじ。艱難を歡迎するは眞の愚人なり。されど艱難がまた祝福を來たすことを否む者はあらじ。艱難自ら人を活殺するの力を有せず。これ消極的勢力なり、否寧ろ人生の消極的狀態なり。之を用ひるは自己の力に在り。一匠の用無しと棄てたる石も、他匠の手によりて隅の礎となることあり。

生命を呑む、慘たらしく血腥き戰爭—火を噴き血を吐き、一手、盛春の勇者を斃し、他手、可憐の婦人、幼兒の兒の喉を摑み、足下に衰死の老者を蹂躙する恐ろしの戰よ。是とて宇宙の靈能經濟に於ては其の用あり。爲に抹殺せられし國あり、爲に大を致しゝ國あり。勝利に誇るは、慢心の故に

衰亡を招くの因となるあり、敗れ屈するは、再び失望の淵より起りて、勝利者に優越するの因となるあり。

吾人は赤心を傾けて平和を祝するも、平和は、必ずしも艱難また戰爭と異りて幸福なるものにあらず。平和は往々戰爭よりも害ありて、國家の元氣を危くし、其の精血を吸ひ、其の品格を亡ぼす。平和は戰爭の如くに、火を以て國家の主聖殿を毀たざるも、而も陋劣なる崇拜を以て、之を褻瀆するに最も力めたり。平和は腕の用を廢して之を弱め、劍を揮ふにも、鋤を執るにも、その何れにも適せざらしめたり。

予の筆を運ぶとき、煙火の音、大砲の轟きを聞き、遙かに又大衆の喊聲を聞く。此等のデモンストレーションは殺伐の聲を交へず、凡べて平和喜悅を表す。京都の全市は盛裝して立てり—男子は禮裝を着け、女兒は美服を纏ひて、今日の英雄—東郷を歡迎す。我等は共に擧りて、君の長壽と、有

爲の前途とを祈らん。吾人は群衆と共に萬歳を唱へん。されど喜は一時、勞は無窮なり。安樂の日は夜を以て去り、次いで勞作の日來り、その年來らん。さらば心樂しみ氣昂りて、來らん業に勇め。悶ゆる胸、疲れし脚を持たず、嬉しき心、輕き足もて、嚴たる前途の責任に向ふべし。

（三十八年十二月京都）

十字架

大小輕重の差はあれ、人みな其の十字架を負ふ。人の知らざるほどに輕小なるはなく、耐へ能はざるまでに重大なるはなし。平和、喜樂、惠福は、肉を十字架に懸けたるところに於て求めらるべきなり。

重荷を輕くすべきものを失ひて、心の輕きを得ることなからんため、漫りに十字架を棄つるなかれ。

日本の新責務

シルレル曰はく、『世界の歴史は、世界の法廷なり』と。諸國擧りて歴史の審判の座に立ち、神と正義との名に判決せらる。過去は我等の法官なり。團體の爲せる行爲は、或は吾人を宥し、或は吾人を罰す。吾人は高潔なる思想感情を懷くを得るも、之を實行せずんば、是れ却つて、歴史の公廷に於ける告訴者たるべし。成功光榮の殿堂に通ずる道は、思想を敷かずして、現實に成せる行爲を甃けり。

日本は世界の歴史に一のレコード――レコード破りのレコードをつくれり。歐洲は、亞細亞人の生命と土地とを恣にするものなりとの、血の文字を以て恥多く書かれしレコードは當然破らるべきなり。人類は從來不義非道に滿ちたりし歐洲人の亞細亞侵略記に、新たなる一ページを開き加へた

り。數億嗜眠の亞細亞の子孫をして、千年の眠より醒め、神賦の生得權を固執せしめよ。彼等をして、自主にして、奴隷にあらざることを聲明せしめよ。されど其の生得權を要求するに先だち、彼等をして自ら之を受くるに値ひし、之を濫用する無きや否やを省察せしめよ。日本の成功の赫きの彼等の目を暗まし、其の虚榮心を挑撥することなかれ。彼等をして嚴かに日本の興隆と其の勝利との原因を學ばしめよ。

吾人が隣邦の民を敎ふるに、其の權利、其の威力、其の義務、其の責任を以てするにあたり、また自ら嚴然として、當に戰場の赫勳ありて、平和會議室の苦功を得たる所以を學ぶべし。人を敎へんとする者は、先づ自ら敎ふるを要す。

吾人は武力を發揚したるを以て足れりとせず。單に覇霸の地位を獲たるを以て可なりとせず。吾人は、戰勝のみが吾人をして前途の目標に向ひて

一大轉進せしめざることの苦き經驗を得たるにあらずや。本能が吾人に囁き告ぐる成達の地位に臻らんには、なほ幾許の缺點あるを自覺す。吾人は追求する理想あり、之を促すに强力なる刺激あり。衷心の最善は、なほ胸奥に潜む。吾人は敢然滿洲原頭に日章旗を飜したる如く、世界の舞臺に立ちて最高の天賦を發揚すべき任務を有す。

日本の亞細亞に立つは、黄色人種の優越または侵畧の故にあらず。顏色は以て殉敎または戰爭の原因と崇むるに足るほどの貴き恩賜にあらず。面色は如何にもあれ、人類—全き人類—一言せば卽ち人道は、爲に戰ひ、爲に死すべき唯一の動機なり。而して此の人道は、歐洲に於けるよりも、亞細亞に於て窮せり。韓國に於ける我が統治權、若し彼の疾苦を和ぐる能はずば、吾人は彼に對して、何等の優越を要求すべき權能なし。人道に反する方計を以て、弱國に力を行はんとするは、無經綸なり、陋策なり。韓國

若し政治上の獨立を喪失すべきものならば、其の民は少くとも、新主の善遇を以て償はるべし。之に反し、彼の民が蹴られ、打たるゝならば、是れ日本が膨脹的國家の名實に不適なるの悲證なり。支那に於ける勢力が、若し最醜の黃禍を釀して、文明を威壓し、人道の退歩を來さんか、是れ吾人が遂に亞細亞に覇たるの權利なきを明かにすべし。

吾人の大陸に於ける今後のレコードが、果して正義自由の進歩と、律法、秩序の觀念とに貢獻するや否や。或は單に歐洲または舊來の壓制者よりも、更に惡虐なる壓制主義に終るや否やは、請ふ、將來の歷史をして之を審判せしめよ。

（三十六年十月）

日本國の時刻

日本の青年よ、諸君は現在の時刻を知るや。日本の時鐘は、今や何時を

報ずるか。

吾人は往々現在の時刻を忘るゝの傾あり。今日は僅に價一圓を以てするも、なほ一個の懐中時計を購ひ得べきが故に、之を所持せざるものは稀なり。其の針の指す時刻は、或は同じからざるべし。凡ては標準時儀を遵奉せざるべからず。而して標準儀の示す現在の時刻は奈何。

日晷は西班牙國のため、夕べの五時を示す。西班牙は約三世紀の昔に於て、時、午なりき。カンパネラは記して、神意は彼の國をして世界を統治せしめんとするにありと曰ひしも、神は西班牙の太陽が徐々に西天に沒せんことを欲して、吾人はこゝに冬日の殘照を視る。佛國の日晷は、午後の三時を指す。此の國は路易十四世が榮華を極めし日に於て、正に十二時なりしも、爾後其の太陽は速かに傾き、たゞナポレオンの不成功を觀んがために暫く停止せり。英國にては時鐘恰も十二を報ず。太陽は頭上に在り。

仰げば其の徐に子午線を正過するを見る。獨逸は朝なほ十一時に到らず。其の民は今始めて業務に熱するの時となれり。然るに米國を見るに、ヤンキーの太陽は頂天に達するに、なほ二時を餘せり。支那はなほ夜なり、鴉は朦朧として暗中に飛翔す。而して四億の豚尾は枕上に横たはりて、黄金を夢み、千年の昔を夢む。

我が國の太陽は正に東天に昇り、僅かに曙光を放つ。世界の此の地に在りては、時は尚晨朝五時なり。東方地平線は、日出の光榮と生氣とを以て輝く。早起の勞働者は、既に暖き寢床を離れたり。家婦は朝餐を炊き、戸戸の竈より渦卷く煙は、不言能く此の國の醒起活動するを語る。君よ、障子を打つはたきの音を聞かずや。掃除勇ましく、小兒は顏を洗ひ、其の長けたるは、カバンを掛け、算盤を携へて、登校の準備をなす。中には登校に二時間を歩むものあり。

日輪は赫灼として昇れり。溫乎として光前に夜雲を散らし、闇の神を遁去の國に追へり。若やかなる日は明けぬ。新希望は汝を支配し、新責任は汝を呼ぶ。醒めよ、汝眠れる者ものよ。起きよ、汝醒めたるものよ、務めよ、汝起きたるものよ。洵美なる日本の國土は、悉く其の赤子を招いて、彼の祭壇に各自の供物を捧げしめんとす。東鄕の艦隊も、大山の軍隊も、我が國史を全うせず。彼等は新日本史の完結にあらずして、その冒頭なり、我が眼界に廣濶なる展望を開きたるものなり、我が手の爲に勞働の範圍を擴大したるものなり。

夜の善かりしものは、既に益なし。『死せる過去をして、死者を葬らしめよ。』蒲團を疊め—先つ之を日に曝すことを忘るゝなかれ—微光、煤燈、薄暗き行燈は、今や全く其の用なし。寢衣を脱ぎて、日中に適し、勞作に可なる衣服を纒へ。新しき皮囊は、新しき酒の爲に備へらるべきなり。封建

主義の孔子をして、古書堆裡に安息せしめよ。武士道の朽骸は、之が遵奉者の白骨と共に葬るべし。生々更新の氣魄を以て、明け行く日の業を歡迎せよ。

（三十八年十一月）

新年の務

舊歳死し、新年生れ、矛の所思は再び死者と生者と、往者と來者の間とに彷徨ふ。無限に短き現在が、過去、未來てふ二つの無窮を連ぬるがごとくに、元日は二個の生命、即ち歴史に屬するものと、尚未だ『時』の胎中に生り出でざるものとを結ぶ。

太陽の赫々たる運行は、地上に四季を來たし、季はおの〳〵永遠の循環をなして、人類に各樣の責務を賦す。牧歌的時代の祖先は、唯だ四季の暗

示に從ふを以て其の業足れりとし、盲目的に勤勞して、春耕し、夏耘り、秋收め、冬藏したり。

牧歌時代は詩人の好題目なり。吾人は此の時を以て、遲々たる牛背に跨り、笛を吹きて星辰の無韻樂に和する長久の行樂なるが如くに思ひ、農耕時代の生活を見るも、亦た等しく吾人をして、辛勞無く、不平無き、安逸適意の生活なるが如きの感あらしむ。

吾人の想像はかく原始時代の單純生活に到り、心之がために長息す。

吾人は過去に別るゝも、なほ之に繫がれ、之に魅せられ、引かれ、押されて、その追隨するところとなる。ヴント曰へらく、『人のみ、過去との關係を自覺す。動物的自覺は、唯だ一時的にして、如何なる場合に於けるも、其の連續は個々の生命の範圍に限ぎらるゝを通則とす。人間自覺の連續は

其の最劣等の程度に於けるも、少くとも數時代の傳承を含めり』と。人は過去の產物なり。老枝に崩ゆる若芽のごとく、その各時代は苔蒸す歷史の枝頭より發芽して、花實の新蕾を開くの小枝となる。葡萄の實その蔓に附くが如く、吾人の心は過去に繫がり、住時の傳說的黃金時代に憧憬す。

されど吾人の責務は過去に存せず。過去は吾人の祖先に屬す。曾て休息すること無き太陽は、吾人に齎すに他の時代と、他の責務とを以てす。

時は變化せり。牧場は區劃せられて耕地となり、田畑また繞らすに垣を以てして、餘地を工場に讓る。牧童の笛聲また聞くべからず。田植の歌、連枷の音は遠く消え、野人の聲は、器械の響に沒して、日々に微なり。田舍の光景は、千萬の煙突より騰る煤煙の陰に隱る。

時の變移と共に、吾人日常の責務また變化す。各代、各歲、各季は、その異なる要求を有す。時々の象徵を正解する者は賢なり、其の要求を充たす者は幸なり。

『現在は我等に耐へがたき重荷を負はせ、現在は許しがたき不公平に充てり。現在は害惡と腐敗との惡臭を放つ』と。かゝる哀泣歎聲は、陰屈なる預言者の唇頭にあり。アゝこの類の哲人よ。汝の軀は、汝の兄弟と太陽との間に立ち、地上に長き陰影を投じて、世を暗黑ならしむ。貧叟ダイオジニースより、日光と暖氣とを奪ふことなかれ。

世は決して澆季ならず、人間は—彼はなほ其の造物主の姿を存す—蓋し創造の日よりも善良なるべし。一たび彼の胸底に點ぜられし光は、長へに燃えて、全く消燼することなし。其の消滅に似て、なほ微照する時も、其

の罪は燈心にもあらず、石油にもあらずして、空氣のため—酸素の缺乏せるためか、はたまた風の吹き荒むがためなり。

人心は全く邪路に迷へるにあらず。現世も亦同じ。現代の腐敗は、聖人、賢者の耐へ難き所にあらず。世の不公平は、熱心これを捜る眼、專心これ聞く耳には多大なり。豚の世界を見るは塵芥の山なり。豚の塵芥の山を見るは、樂園のごとく善し。心清き者は世を歩みて、凡ての男子は高尚に、凡ての女子は純潔に、凡ての地は卽ち神の宮なるを見る。この心は、マーカス、オーレリアスの所謂『宇宙的情感』に唱和して曰はん。『大宇宙よ、予は汝ぶ調和の一部を成せる凡ての者と調和す。予に於ては、汝の季節を得たる物は、何物も速かならず、何物も遲からず。ア、自然よ、汝の季節の結ぶものは、皆、予の爲の果實なり』と。

自然の季節が吾人の爲に結びつゝあるものは何ぞ。自然の神が、其の期滿つるによりて、吾人に要求するものは何ぞ。世界の吾人に期待するものは何ぞ。吾人の心を刺勵するものは何ぞ。吾人の人類に授くべき使命は何ぞ。

戰爭が若し吾人の爲し得べき凡てのものたり、はた最良なるものたらんか。吾人は匈奴、韃靼人と何の擇ぶ所かある。羅馬人すら、たゞ戰ふことを以て滿足せざりき。

新年と、また之に次ぐべき多くの歲月との事業は、頗る經濟的にして且つ道德的性質のものたるべし。

戰爭の務は破壞なり。其の破壞力は、砲火相見ゆる間にのみ行はるゝに